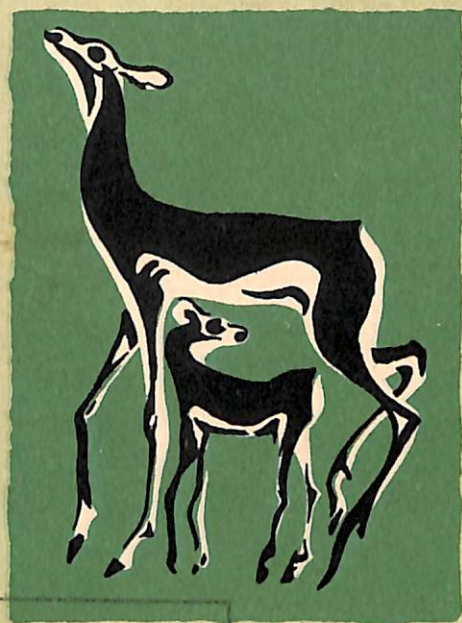


保 存 用
永久保存

3. (- 3



都立松原高校図書館蔵書

No. S - 58

東京都立松原高等学校図書館

東京都立松原高等学校

0832 (1957)

「る・くーる」第五号目次

「る・くーる」に寄せて……………校長 沢野次郎 1

特別寄稿

憲法第九条成立の一問題……………坂本夏男 2
新高登山記(一)……………永浜先義 5

文苑

詩

冬 の 夜	寂 し い 戯 れ	街 上 車 輪	巨 大 な 車 輪	母 独	孤 独	宇 宙 の 糧	百 姓
一年E組	三年B組	一年A組	二年A組	一年B組	一年B組	三年E組	一年B組
杉戸克彦	中西光子	小長光典	児玉典	山田美津子	山田美津子	福田雅子	竹村順子
14	14	13	13	12	12	11	11

☆随想☆

未来に向つて……………三年E組 平野一子 15	帰り路……………一年A組 仲内典子 22
八人の友達……………一年E組 中川敏子 16	一年間を願みて……………一年C組 若林澄子 23
受験勉強……………三年D組 奈良茂男 17	父の故郷に帰つて……………三年A組 高橋由貴子 24
すーらん……………一年B組 山田美津子 19	歌舞伎小談義……………二年B組 中島清徳 25
父……………二年B組 古川絃一 19	思い出……………一年E組 笹岡治男 26
就職—思い出すまゝ……………三年A組 国田光子 20	わが高校生活の思い出……………三年D組 吉村和洋 28

名作物語

テオドル・シュトルム原作

みずうみ……………二年A組 児玉 典 31

創作

「アルバイトのスケッチ」抄……………二年D組 木村拓郎 35
家出……………二年A組 木村康雄 37
木枯し……………一年C組 高津竜二 41

文苑

住所録

(教職員、新卒業生)

表紙……………木村拓郎
カッパ……………上条喬久

文学は断編の断編である。起ったこと、語られたことのごくわずかに書きとめられた。その書かれたものゝごくわずかに残っている。

大きな必然は人間を高め、小さな必然は人間を低くする。

人生は色どられた影の上にある。

二つの平和な暴力がある。法律と礼儀作法とがそれだ。

喜びには悩みが、悩みには喜びがなければならぬ。

頭がすべてだと考えている人間の哀れさよ！

人生は悪しき冗談なり。

ひとりの人を愛する心は、どんな人をも憎むことができません

人間こそ、人間にとって最も興味あるものであり恐らくはまた人間だけが人間に興味を感じさせるだろう。

われ／＼が歴史から得るところの最上のものはそれがひき起す感激である。

月桂冠というものは、どこで御覧になっても幸福よりも苦惱のしるしです。

愚か者と賢い人は同様に害がない。半分愚かな者と半分賢い者だけが最も危険である。

もはや愛しもせねば、迷いもせぬ者は、埋葬してもらうがい。

「る・くーる」に寄せて

校長 沢野次郎

本校文芸誌「る・くーる」発行について何か巻頭の辞という御依頼でありましたが、文芸誌にふさわしい第一頁の言葉が出て来ない事を残念に思います。

むしろ本文であれば随筆的なものも生れて来るかも知れませんが、ここでは単なる感想だけを申し上げたいと存じます。「る・くーる」も巻を重ねるごとに本校の歴史と共に内容的にも価値のある様相を呈しますが、なかなかもって生徒の力では十分に發揮出来ないうかも知れません。しかし十分出来ないところに又若さがあり、或は未完成の良さがあり、これから伸びる余蘊を持って居る訳であります。しかしその良さも努力なしに放棄して置いては価値が生じて来ない。私が生徒諸君に望む事は自分で自分の未完成を知り、向上への努力を続ける事であり、絶えず努力、青年でなければ出来ぬ力、その力が尊いのであります。決して恥じてはいけません。青年は失敗が多い。しかしそれは真の失敗ではなく建設への段階であって当然教えられるべき完成への過程であって、文学においてもそうではないかと思ひます。恐らく未完成の良さの中に含まれている事と思ふ。青年の良さがあると同時に青年のなすべき事は非常に多い。それだけに忙しい。忙しいという事は常に努力のある証、ひまな人間には努力がない。しかしその努力もすぐに認められると思つてはならない。向上とは決して字の如く上にどん／＼向う事。しかしまだその上に上がある。したがってそこへの努力も続けなければならぬ。あるいは限りなく上への努力を続けなければならぬ。そうなると一生がその連続かも知れぬ。それでは若さも年令もなくならぬのではないかという疑問が出るが人生は努力の連続であります。しかしその事に段階がある。年令の段階、若さの段階、努力の程度の段階という具合にいろいろと差別が起つて来る事と思ひます。私は生徒諸君が最大の努力によって最大の若さ、最大の段階と価値を堂々と勝ち得る様希望します。「る・くーる」の成長発展もその意味でおゝいに将来が期待されます。もちろん、その成果が後の「る・くーる」にも自然と発表される事になるのではないかと思ひます。



特別寄稿

論 評

憲法第九条成立の一問題

教諭 坂本夏男

法を賛美し、上院の証言と同じ趣旨の演説を行っている。

次にホイットニーによればこうである。ホイットニーは、三十年十月三日の「ライフ」に「敗戦国民を鼓舞する」と題する一論を掲げ、二十一年一月二十四日、幣原首相がマックアーサーを司令部に訪ね、会談三時間に及んだ事を記した後、会談の内容に触れている。

マックアーサーの話によれば、幣原首相は、病氣見舞に貰った薬のお礼を述べ、提案された新憲法につき語り出した。そして幣原首相は、憲法の中に戦争と軍備を永久に放棄する条項を規定したいと申し出た。

ホイットニーは、当時民政局長の地位にあり、マックアーサーの片腕として、わが国の占領行政の任に当った人物である。

かくて、マックアーサーの言葉に信頼すれば、現憲法戦争放棄の規定は、マックアーサーの発意ではなく、幣原首相の進言によって生れたものであると、考えざるを得ない。アメリカ側の資料に基づけば、いわゆる「押しつけ」ではなく、「自律」によって成立したの

一

改めて言う迄もなく、現行の日本憲法の第九条は、国権の発動たる戦争を放棄し、陸海空軍の保持を禁止しており、世界憲法史上類例を見ないものである。然らば、戦争放棄、軍備全廃は、いかにして生れて来たのであるか。

まず、マックアーサーの説明に基づけばこうである。すなわち彼は、昭和二十六年（一九五一年）五月四日、米国連邦議会の上院で証言して曰く、

日本国民はかれらの意志で、かれらの憲法に戦争放棄の規定を書き入れた。幣原首相はわたしを訪れて「わたしは長い間考えた末、平和の確立の問題の唯一の解決は、戦争をやめる事にあると信じるにいたった。……わたしは、われ／＼が起草しつゝある憲法にそういう規定を入れるように努めたい。……」と述べた。

更にマックアーサーは、三十年（一九五五年）一月二十六日、ロスアンゼルスで催された彼の誕生祝の席上でも、日本の戦争放棄の憲

である。

二

前記の幣原・マックアーサー会談よりさかのぼること三ヶ月余りの頃である。二十年十月十一日、総司令部は幣原内閣に対し、憲法の改正を要求して来た。そこで政府は憲法問題調査委員会を設け、直ちにこの仕事に着手し、翌年一月にその成案を見たので、二月一日総司令部に草案を提出した。総司令部はこれを検討した結果、明治憲法のひかえ目な修正に過ぎない、天皇統治はそのまゝだし、軍は依然として残っている、……要するに「内容空疎なつかみどころのない字句の修正にかくれて本腰になって問題に取り組んでいない」という見解を出した。

マックアーサーはホイットニー政治局長を呼び、松本案を拒否する旨を告げ、司令部で憲法の原案をつくれと命じた。この時の事である。マックアーサーは、自らペンをとった基本的三原則を示し（From General MacArthur's own notes）これを手交した。この三原則の要点は、（一）天皇制の維持、（二）戦争の放棄、（三）封建制度の廃止であった。第二項は本論と直接密接な関係があるので、念のため原文を左に掲げる。

II

“War as a sovereign right of the nation is abolished. Japan renounces it as an instrumentality for settling its disputes and even for preserving its own security. It relies upon the higher ideals which are now stirring the world for its defense and its protection.”

“no Japanese Army, Navy, or Air Force will ever be authorized and no rights of belligerency will ever be conferred upon any Japanese Force.”

「日本の主権の一部としての戦争は全廃される。日本はその関係する紛争を解決する手段としては勿論、自国の安全を確保する手段としてさえも戦争を放棄する。日本はいま世界を刺戟しつゝある高遠な理想に依存して、自国の安全と防衛を図る。」

「日本は永久に陸海空の軍備を保有する事は認められない。又日本のかかる実力団体にも永遠に交戦権は許されない。」

日本憲法原案の作成に關する命令を受けた政治局は、その出入口を全部締め切つて、極秘のうちに昼夜兼行の努力以てこれに當つた。原案は僅か一週間で出来上り、二月十日に脱稿を終つた。越えて十三日、この原案は外相官邸において、日本側に手渡された。手渡す時ホイットニーは、原案を机の上に置き、厳格な態度で言つた、「この提案と基本原則および根本形態を同じくする改正案をすみやかに作成し、提出せられん事を切望する」と。この命令に接してわが政府当局は狼狽したが、結局これを受諾するのほかになく、この案を基礎として再び改正案をつくる事となつたのである。

三

さて話しは一転して、さきの幣原・マックアーサー会談に移る。幣原首相は、二十年十二月二十五日、早朝から首相官邸の自室に閉じこもり、詔書草案の筆をとった。この詔書は翌年一月一日に出された世に言う「人間天皇の宣言」である。その夜から発病して病臥した。肺炎を発したのである。老首相の病氣を知ったマックア

「サー」は、見舞のため米軍軍医を差し廻し、当時稀少であった高性能のベニシリンを贈った。このベニシリンにより、首相は快方に向い、翌年一月中旬は政務を見るようになったので、二十四日の正午頃に、病後はじめて総司令部を訪れ、マックアーサーに病氣の際の厚意を謝するとともに、二人で水入らず会談三時間に及んだ。この長時間の会談は、マックアーサーには異例の事とされている。

この会談で幣原首相は、「原子爆弾が出来た今日では世界の情勢は全く変わってしまった。だから今後平和と日本を再建するには戦争を放棄して、再び戦争をやらぬ大決心が必要だ」とマックアーサーに強く語ったと言われる。けれど、戦争に対する反対や外国内政への不干渉を中心とする平和外交は、幣原首相の生涯を貫く信念であったのであり、この信念は、去る大戦により惹起された数々の惨事を目撃してますます強められたのであろう。マックアーサーは、首相の言葉に深く感動し、強く共鳴した。こうして戦争反対・武力放棄のアイデアが大きく浮んだのである。ただし、戦争放棄の規定を、憲法に織り込む事について言及されたか否か疑問である。

この疑問は、次のことから起る。すなわち、幣原内閣は憲法改正には消極的であり、首相自身も、憲法はその内容よりもむしろ運用が重大であると考えていた。又この内閣の下で作成された松本案は、前述の如く「明治憲法のひかえ目な修正に過ぎない、天皇の統治はそのまゝだし、軍はいぜんとして残っている」と総司令部から指摘された。松本案には、軍隊は存続したのである。第十一条には「天皇は軍隊統率の大権を有す……(The Emperor has the supreme command of the armed forces……)」とあり、第十二条には「天皇は帝国議会の協賛により、戦を宣し、和を講ず」(The Emperor

declares war and makes peace, with the advice and approval of the Imperial Diet) とうたっている。かくて、幣原首相には平和を希求する強い願望はあっても、この願望を憲法に反映して具体化するまでの意志はなかったと判断される。

そうすれば、何故にマックアーサーは、幣原首相が憲法そのものの中に戦争放棄を規定するように申入れたと主張するののか。これは故意か、はたまた誤解か、大きな疑問とななければならぬ。

これにつき連想されるのは総司令部ときわめて深い接触のあったわが国の一政治家の語である。話しの要旨はこうである。

マックアーサーはこう言った。わたしが勝利の將軍としていよいよ日本本土に進駐する事になったとき、どうすれば日本を平和で民生的な国家にする事ができるかについて、いろいろ考えた。その結論の一つとして、日本に再び軍隊を持たせぬ事である。それが日本のため、アジアのためであり、世界平和にも役立つと信じた。そこで憲法改正に際して、これを織り込む事にした。もし日本が他国から侵襲された場合は国連によって守れると思っただけ……しかし朝鮮動乱の勃発は、あまりにも早くこの理想を打ち砕いたのである。わたしの日本統治には、成功もあれば失敗もある。しかし、その失敗は日本に悪かれかしと思つてやった失敗ではない。それはブレン(頭脳)のミステークであつて、ハートのミステークでなかつた事だけは、理解してほしい。その最大のものが、日本から軍備を奪つた事であつた。

これはマックアーサー自身の直接の言葉ではないので、資料的価値は乏しくなる。しかし、疑問解決の鍵としては、極めて暗示的なものではなからうか。



特別寄稿

新高登山記(二)

教諭 永浜先義

前号概要

これは昭和十八年の夏休み、台中州教育課主催の新高山登山隊に参加した時の記録である。新高山は台中、高雄、台南の三州境にある高山で海拔三九五〇メートル、わが国最高の富士山を凌ぐこと一八〇メートル。新高山麓の首座をわが国最高峰である。一番低い熱帯から漸次温帯へ更に冷帯を経て頂上は寒帯である。つまり熱帯から寒帯までを垂直的に数日の間に経験しようというのである。

第一日 (七月十二日)

午前八時半、気温二十九度、バスに乗り込んで南投街を出発。樟の並木道を抜け、水田、甘蔗畑、芭蕉畑、パイナップル畑等を眺めながら集々街に向う。こゝが新高山登山団員の集合場所である。午前十時、駅前広場で団員全部集合し班の編成がなされる。男子二十六名、女子十二名。団長は体育主事の有馬氏。登山上の注意等があり、十一時バス二台に分乗して内茅埔の少し

手前迄行く。こゝでバスを降りる。こゝから東埔下まで台車(高砂族の労働者の押すトロッコ)で行く予定であつたが、数日前事故があつたため、台車で人を運ぶことは禁じられていた。由リェックサックだけを台車に頼む。やむなく六里十二町を歩かねばならない。歩く度にゆら／＼と揺れる釣り橋も幾つか通つた。足にマメができたらしく痛む。入墨をした色の黒い高砂族の女にも何人か会つた。狩猟からの帰りである高砂族の男にも会つた。彼等は腰に着刀をさげている。顔はいかにも慥悍ではあるが正直そうだ。時々鶯がよい声で鳴く。日本の春の山を思い出させるなつかしい声だ。栗畑の所々には白百合も咲いている。汗が流れる。誰もが今は黙々として歩く。谷川の音が聞える。こんな山奥に、珍らしく立派な製材所がある。製材所に働く者だけの二、三十戸位の小さい部落がある。こゝが台車の終点でこゝで台車からリェックを受け取る。今までの疲労の上に、更に肩に重み加わる。雨が降り出す。かねて用意の油紙をかぶる。絹糸のような細い雨で涼しい。山々が煙つて見える。全く墨絵のように美しい景色である。針葉樹の林を通り抜けると

雨に濡れて美しい仏桑華の生垣の間に紫色の花が開いている。生垣の内は「私立和社国語講習所」であることは門標でわかった。そこには小さな部落があった。まだ新しい木の香のする専売局収納所に行つて休ませてもらう。午後六時頃だった。気温十八度。さっきの針葉樹林は台湾杉で大学の演習林であるとその人が教えてくれた。一杯の熱いお茶がとてもおいしかった。又集合、出発、少し行った所で福建人の電気工と会う。「この道は崖崩れがしているから山越えをしなければ行けない。」と教えてくれたので少し後戻りして急な山道を登らねばならなかった。山を越えて東埔下に着いたのは九時頃であった。同員もばらばらになつていたので、ここで待ち合せることになった。一人、足に煙草を包まれているので、なかなか皆が揃わなかった。もう暗闇に包まれていた。これから今日の行程の説明があり、夕食を食べ終えて寝たのは十二時近くであった。今日は約七里の行程を歩いたのである。明日は四里十九丁だそうだ。

第二日 (七月十三日)

目覚ればこゝは東埔山荘である。鉱泉(炭酸泉)で顔を洗ひ口をすく。午前七時半、気温二十一度。下駄をつまかけて裏へ廻ると滝がある。山荘の広場で団員一同朝礼。旭光を浴びて軽い体操をする。気がせいせいする。こゝは山腹にあつて北東・南は山に囲まれ、西側だけが開けている。遙か山裾には高砂族の耕作している水田が薄緑色をしている。旅装を整え広場に集合。広場には台湾には珍らしく桜がたくさん植えてあつた。こゝらは海拔が高いので日本とあまり気温が違わないので桜も美しい花を咲かせるのであろう。警察官吏駐在所に挨拶をして午前九時東埔を出発。鶯と白百合とが交互に我々を慰めてくれるのは昨日と変らない。やがて大きくカーブすると大断崖が眼前に突つ立っている。こゝがこのコース最大の難所で「親知らず」と書いた標札が立っている。絶壁の中腹にわずかに足をさくえる

にたる巾の岩道が縫っている。中途ではその小径すら絶えて手で岩につかまり、出づばった岩の向うに足場を求めて渡らねばならぬ。一步誤れば真逆様だ。向う側の人にビッケルを渡し、足場を作ってもらふ。通り過ぎてはとして胸をなでおろす。蜘蛛滝や雲竜滝がある。あたかも竜が雲にでも昇るような勢で、ものすごい。「阿蘇山標高一五九二米」の標柱を過ぎたのが十一時頃、気温二十三度。こゝからは斷崖が一ぱい植えてあり所々に木莓の朱い実もあつた。又黒い岩には岩松が元気のよい緑を見せていた。花つり草(トレニア)の花も路傍に咲いていた。全てが温帯の植物になる。樂々駐在所に着いたのが十一時四十分。こゝで昼食。こゝにも吉野桜がたくさんあつた。午後〇時十五分出発。「大山標高一七一三米」「藏王山標高一八四一米」などを過ぎてぼろぼろ登つて行く。やがて静養たる林の中に入る。ところどころの木々には説明の立て札がある。「においたぶ(くすくす)樹皮線香製造」等と。「対馬駐在所」で少憩の後出発する。むろん列をなして出発するのではない。もう早い人はとくに見えない。遅れている人は遙か彼方を眺めるように歩いている。下の方から雲が昇つて来るのが氣になつた。まもなく霧のような雨になつた。獨り身の朱い花が雨に濡れているのもよい。「觀音駐在所」には白いフラスコが一杯咲き乱れていた。雨は少し降りになる。少し寒くなつて来た。新高赤松にきりも(サルオガセ)などの寄生苔が長く垂れ下つてゐる所は、もう冷帯地方の眺めである。一寸指針の底のように凹んだ所に「八通関駐在所」があつて、今日我々の泊るべき宿である。午後五時半頃着いた。気温十八度。これが台湾の真夏だとはどうしても思われぬ。今日の行程四里十八丁を八時間以上もかかっている。夕食を済ましてから炉に火を焚いてもらつて濡れた衣服を乾かしつゝ今日一日の種々の出来事を話し合つた。明日はいよいよ新高絶頂をきわめる日だ。床に就いたのは九時半頃だった。

第三日 (七月十四日)

午前二時起床。気温十三度。丹前を着ていてもなおはだ寒い。窓を開けると青い程澄み切つた月が西の山の端に浮き出ている。寒風がビューと窓から吹き込んでくるので月を賞しながらもすぐ窓を閉めねばならなかった。

ランプの灯をつけて三十八名は朝食をそこゝに済まし、出発準備を整えた。有馬隊長より、

「暗闇であるから前の人と離れないように。今日はどんなことがあつてもがんばってもらいたい。」との注意があつた。外に出て整列する時にはもう月影は山にかくれてしまつて、まったくの暗闇であつた。

松明に火を点じて、第一班男子、第三班女子、第二班男子の順に整列。いよいよ出発だ。午前二時十五分。道案内として高砂族の男を二人雇つてある。

道に穴があると先頭の人「穴があるぞ、注意せよ。」と大声で言う。それを次々に後へ言い継ぐことにしてある。

「丸太ん棒があるぞ、右側注意。」

「一本橋、用心せよ。」

「大石がある、足もとに注意せよ。」

等と云う言葉が闇の中で、先頭から次々に後へ言い継がれて行く。松明の赤々と燃える光が唯一の頼みである。道といつても一尺にも足らぬ岩道だ。用心しないとすべる。道の片側は常に断崖で一步誤れば命はない。頂上までに五つ難所があるそうだが、第一の難所を過ぎた所で第二班の班長の発案で「男と女とを一人置きにしたがよくないか、もしもの事がある時、力になれるから。」とい

うので編成換えをした。そして番号をつけた。こゝからは一列縦隊である。小生は「十番」であつた。

「出発」

どうかすると松明は風のために吹き消されそうである。幾度か消されては火を点じ、点じては消された。三十八名の行列は進む。その時だった。

「カラ／＼、カラ／＼。」

「ガラ／＼、ガラ／＼。」

「クワーン。」

「落盤だ!!」

「伏せろ、／＼!!」

と誰かが叫んだ。無意識のうちに僕も地べたに伏せていた。

上の方から岩がどん／＼飛んでくる。岩に押し落されたら最後、千仞の谷底だ。何かつかまるものはないかと手さぐりしてみたらガラ／＼した岩ばかりで何もない。もちろん松明は消えているので真暗闇だ。

その間にも岩の崩れ落ちる音は聞える。リュックの上を飛んでゆく岩が感ぜられる。まったく生きた心地はない。

「バック、／＼。」

と誰かどなった。しかしなか／＼後の者は退らない。やつとその後者(十一番)が退った氣配がしたので、僕は飛ぶようにして後退した。まだ岩の飛ぶ音は聞える。これはてっきり二三人はやられたなと思つた。

「異常ないか——。」

「番号」という声が後から聞えた。

「一、二、三……」やはり僕は十番だったので、僕より前には事故のなかった事がわかった。

「三十五、三十六、三十七、三十八。」

三十八の声を聞いて皆胸をなでおろした。しかし一人負傷された方があった。それは僕より後の人であつたので、誰だか、又どの程度の傷だかはつきりわからなかった。

「危険だから一旦引返して夜が明けてから登ろう。」と誰かが言い出した。僕もそれがいゝと思つた。しかし団長の声で、「前進！」という命令が下つた。落磐の音はいつのまにかやんでいった。

松明で道を照らし、全神経を耳に集中して歩いた。道といっても岩の上にたゞ足の踏みかゝりがあるというだけのものである。こんな所にどうして伏せられたか、我ながら不思議だつた。ひや／＼しながらやつとその第二の難所を通り過ぎて小憩した。

一番先頭の高砂族の案内人は「カラ／＼」という音がした時「つーッ」と前方へ走り去つたそうである。一寸した小石でも上の方で落ち出したらその崩れは下方へ行く程段々大きくなり大落磐となるのだ。

「岩と岩とがぶつかる時火花が散って、焼ける臭がぶんとした。」
「俺は大きな岩角の下に頭を突っ込んでいた。」等と言っている人もあつた。

皆が生きた心地はしなかったと言ひ合つた。

× × ×

第三の難所は何もなかった。他はどこが難所かもわからずに通り



吹き飛ばされはしないかと思われる程ひどい風だ。岩は粘板岩でザラ／＼と剥げてしまつて手がかりにならない。少し歩いては休み、休んでは又歩いた。急げば息が切れそうになる。

まもなく頂上の陸地測量部の三角標柱が見え出した。さアもう一息だ。

頂上には石造りの新高祠があつた。誰があげたのかお神酒まであげてあつた。とにかく無事に登山の出来た事を感謝した。

時に午前八時半気温九度であつた。(樺太の大泊の八月が十六・八度位だからそれよりも寒いわけだ。)

熱帯から寒帯まで歩いて来たわけだ。いゝ知れぬ喜びが湧いてくる。

全員が揃つたのは九時過ぎであつた。団長の音頭で「万歳！」を三唱した。我々は天にも響けと「万歳」を叫んだのだつた。

それから記念撮影をした。かねて連絡をとつてあつたとみえて、写真屋が来ていたのである。次に写真屋の説明を聞いた。

「まずこの新高祠は大正十四年に建立になり台湾神社の祭神一座及び大山津見命を奉祀してあります。頂上から見えます山々は、あれが東山、こちらが北山、それから西山、南山で御覧の通り四峰東西南北に正しく十字に主山を取り巻いて峙ち、主山は突元として四辺を圧しています。南山は女子の方は登られませんか。あれに登ると難産するそうですから」と。

東に大水窟山、秀姑巒山、マボラス山、東郡大山、東嶺大山、バナイコ山、八通関山、北には鹿林山、王山、又かすかに第二の高山である次高山、大雪山等が見え、西には卑南主山、大武山、南に関山、新関山等が見える。今日はよく晴れているので、遙かに台中平

過ぎた。新高駐在所を過ぎて、新高根松や梅の林の中を歩く。いつの間にか明るくなつてきた。東の空が紅に染まつてなんともいえぬ美しさだ。やがてその色が黄金色になり、強い金線がわれ／＼の眼を射た。今まさに太陽が東の山にその姿を現したのである。眞紅に燃える太陽が……。何という壮麗な大自然の美しさであろう。

しばらくはその美しさに立どまつて誰も歩こうとはしなかった。実は新高の頂上で御来迎を拝む予定であつたが、意外の落磐のためこゝで陽が昇つてしまつたのである。

高山病にかゝるおそれのある者には薬が飲まされた。林を抜けると「はいびやくしん」の見事にはった地帯に出た。こゝに「富士山標高三七七六米」と記した標木が立つていた。

やがて新高主山のあの突元たる頭角が眼前に現れた。怪奇と言おうか。無類の絶壁美を見せている。こゝからは岩石のごろ／＼した急斜面を電光石火に登るのである。

後から「応援たのむ。」という声が聞えた。落磐の為負傷されたS氏の容態が悪いのぢやなからうか。僕は前の方へ伝令となつて警手(高砂族で警察官の補助をする者)を呼びに行った。

「はいびやくしん」もなくなつて、岩ばかりで何の植物も生えていない地帯に來た。草一本ない。高砂族の警手が三人居るので「怪我人が居るから手伝つてくれ。」と頼んだ。三人の警手はすぐ下つてくれた。(警手は高砂駐在所から派遣されて來ていた者であらうか。)

阿里山から登る道と、八通関から登る道との合した所まで來て一息ついた。こゝから頂上まで三百六十米と書いてある。この間がいわゆる「馬の背越え」だ。風がものすごく吹くので寒い。風に体が

野まで眺められた。光つて見える銀帯は何という河であらうか？
頂上で飯を食つて十時に下山。
「新高びやくしん」地帯を通り抜けて新高根松の林を過ぎると、新高下駐在所である。こゝで飯を炊いてもらう。

新高しやくしんや茨などが路傍に見受けられた。桃色の花をつけた可愛らしいりんどうなども咲いていた。りんどうといえば阿蘇山を思い出すが阿蘇のりんどうは紫色の花であつたように思う。ひかげのかずら等が生々としてはいまわっている。

下から雲がむく／＼と上つてくる。いつのまにか雲にとり囲まれてしまつたと思つて雨になつてきた。霧のような雨だ。一閃先も見えない位になつてしまつた。

岩の横腹に短かい丸太をさし込みその上に板を渡した棧道を、すべらないように注意しながら歩く。(努力坂や奮闘坂などは旧道であつて新道は割合よい道だ。)

雨に煙つた緑色の山々がとても美しい。しばらく木の洞に雨やどりしたり、岩かげに入つたりしたが、「ぶと」がおつて足を刺されて掻いので長くは居られない。油紙は昨日の雨で駄目になつたので濡れながら歩く。膝ががく／＼して力が入らない。下り坂が多かつた、めであらうか。「膝が笑う」と誰かが言つたが仲々うまい表現である。足が思うようにならない。鹿林山荘に着いたのは午後五時過ぎであつた。

今日の行程六里二十一丁。随分苦しい行程であつたが、又愉快でもあり、美しい眺望を味わうこともできた。今日は落磐のため皆が緊張したせいか高山病にかゝる人は一人もなかった。

× × ×

風呂を浴びて夕食を済まし、丹前を着て火鉢の傍に集まった。

タータカ駐在所の巡査N氏(四十歳位)も来ていろ／＼と新高で遭難した人を救助に行った話などをしてくれた。

「三年前の冬だった。高等学校の生徒が二人で登山して、一人が数千尺の断崖を滑り落ちた。東埔の駐在所から捜査を頼んできたので警手を連れて出かけた。雪が積っているでなかなか歩き難い。すべり落ちたという断崖に行ってみたが真白い雪ばかりで人影はない。二日たち三日たっても消息がわからない。もう到底命はない。あの雪に埋もれてしまったのかも知れないというので、遭難した生徒の親と学校にその旨通知した。

私達の方では二人が喧嘩して、一人が他を突落したのじゃないかと思つて、他の一人にその時の様子を詳細に尋ねた。しかし四日目に東埔駐在所の方で遭難した生徒が発見されたとの報が入った。やはり喧嘩したのではなかった。幸い雪に乗って滑ったのでたいした怪我もなく、生米を噛り雑話を食つて餓をしのいでいたのだつた。」と朴とつな巡査は話してくれた。

又「高砂族同志の喧嘩はありませんか。」と問うと

「ありませんね。六年前に一度獵場のことと喧嘩がありました、両方の頭目と呼んで石を土に埋め『この石が腐るまで絶対に喧嘩しません。』と約束させたが、それ以来喧嘩などないですな。高砂族は約束は厳重に守りますから。」と言つた。その巡査はこゝに九年も勤めていと言つていた。山荘と巡査駐在所の外には高砂族の警手が二人居るだけで全然人氣のない所である。猿が三十四、四十四と群れてこの山を通ることもあるそうである。なんとなくお伽の国のようである。

外は小雨がしと／＼と降っている。ランプの光が巡査の顔を紅く照らしている。

明日は僕は負傷されたS氏のお伴をして新高口から汽車に乗るの
で来た。

ランプの火を細めて十時頃床に就いた。

(次号では第四日阿里山へ。そして第五日登山鉄道で嘉義に下る。
嘉義は北回歸線下にある都市である。)



文苑

☆ 詩 ☆

百姓

一年B組 竹村順子

朝モヤが、

一面にひろがっている中に、

鶏がときを告げる。

東の空はまだ暗い。

百姓屋から一すじの、

細い煙がモヤにとけていく……。

東の空が白みかゝる。

百姓達は野良着に身を包み、

アゼ道をふみしめて……。

ザクッ、ザクッ、

満身の力をこめて百姓は、

汗を散らして大地にいどむ。

むっくり土がおどり出す。

ザクッ、ザクッ、ザクッ、

夕日をあびてふりおろす。

長く影ひく農夫のうでに、

夕モヤが静かにおりるその中で……。

ザクッ、ザクッ、ザクッ、

大地をしつかとふみしめて、

百姓の力強い一ふりのクワが、

強大な大地にいどむ。

ザクッ、ザクッ、

真黒な地はだを見せ、真黒な大地は、

これから始まる生命の、

すべての用意を……。

宇宙の糧

三年E組 福田雅子

この私の小宇宙は

冬の日の儚い戯れだったのです

遠い祖先の諸人から謎の生を受け
惜しげもなく固まった宇宙だったのです
他愛もない慟哭の果ての微睡に満足し
そして微笑むその中に
限らない女の命を包んで
あの大宇宙の強者を崇め
柔和な大宇宙を囀り
それが奏でる慎しい音楽の美しさだけに
魅せられていたのです
だがこの私の小宇宙に
冷風が舞い込むと私はこの宇宙の中で
狂舞しているのです
この宇宙に静かな自愛を託し
私の「此岸の都」を去ろうと望んでいましたが
果てしもなく冷気の漂う霧中を
たゞ模索している様でした
この私の小宇宙は
冬の日の惨い戯れだったのです

孤独

一年B組 山田美津子

無理に柵を破って出て来た。
柵はひどくいたんだ。

道徳、義理、友情(?)から放されて、
一人野原を彷徨る。
自由の広野は、
大手をひろげて迎えたように思われた。
けれど、
草達は私に無関係なことを語り合っている。
小鳥達が楽しそうに、
あるいは悲しそうに歌っているけど、
こゝでも、
心のトビラを開いてくれるものはいなかった。
ふり返り見ると柵は新作されていた。
少なくなった一本のくいを、
悲しんでもおるまい。
柵はそっぽを向いていた。
柵をこわして入る気力はない。
過去の人達はなつかしい。

母

一年B組 山田美津子

はじめて雲を見た時、
「あれが雲なんですよ」と教えてくれ、
泥の中に転ぶと、
「だめな子ね」と言っではぐりする。

いけないことをしてぶたれて泣いた。
いつの間にか夢中になって目がさめると、
いつもより大きなおやつが待っていた。
新しい服を安サラーを貯めて買ってくれた。
新しい服を着てイチゴを摘みに出掛けた。
仲間と一緒に野原を駆けまわった。

夕日が美しく輝いている時、

服を着ずに泣いて帰った。

お月様が明るく照っていた。

服をさがす母の髪が静かに風になびく。

りんごの木に服をみつめて、

涙を流して喜ぶ母の、

月を見る目は美しかった。

巨大な車輪

二年A組 児玉

典

私のいづく理想は、
現実という巨大な車輪に、
次々とおしつぶされていく。

だが、私は勇気をふるい起こして、
巨大な車輪が残したわたちから、
又、新しい理想を見つけ出す。

街 上

一年A組 小長光和子

私が静かな墓で、
永遠の眠りにつくまで、
この営みは日夜続けられるだろう。

まるで流行が歩いているようだ、

マンボスタイルをした男女、

つけまつげをして、五六百円もするような

香水をふりかけ、

「私はさつまいもなんか食べた事がない」と

言わんばかりの中年御婦人。

キラビヤカなネオン。

もんべ姿はどこへ行っただろう。

買出し袋はどこへ消えたのだろう。

慎太郎刈に聞いてみたい。

整形手術屋はさぞ急がしかろう、

鼻を直して、眼を直して、

親の心を、親のさとしを、

高くなつた鼻であしらっている。

中古タクシーから、新型から、

種々雑多に入り交り、

貧乏人の通せんぼ。

はて、さてどうして向う側へ渡らうか。

寂しい戯れ

三年B組 中西光子

私の心の中で、
戯れている二つの影。
黒い寂しい影を残して、
ひとときを戯れている二つの影。
お前達は、
いつも私を傷つけて去ってしまふ。
どうして——どうしてお前達は——

私の心を、
あの冬の低く垂れこめた雲のようにするのか。
悪戯をしてはかくれてしまい、
心が軽くなつた頃、
お前達は、
どこからともなく出て来て、
又、
私をいじめる。
もういゝ、もういゝ、
そんな寂しい戯れよ。
私を喜ばせておくれ。
もっと若人らしくしておくれ。
寂しい戯れはよしておくれ。
お前たちは、
二度と来ぬ私の青春を、

秋の夜みために、
冷たい、寂しいものにする積りなのか。
もういゝ、もういゝ、
そんな恐ろしい言葉は。
木枯しさをも、
私に同情して、
金色の小鳥を銀杏の木々に舞わせているのに。
やめておくれ、寂しい影よ。
二の影よ。

冬の夜

一年E組 杉戸克彦

冬の夜のはり切った空気の中で、
シリウスの青い光に見まもられながら、
お前の暗い影が、
白い舗道の上に踊っている時、
その影の主は……。

青いおとぎ話の中で、
つんぽのような夜空にたわわっている。
星達のいたずらな眼が、
わた雪のような雲の中の、
楽しいお前の夢をかきむしる。

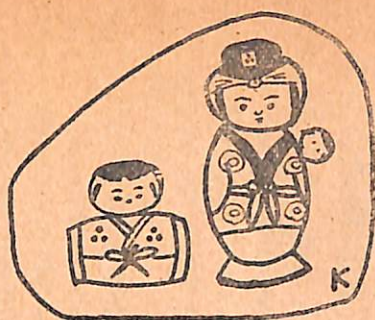
焦燥……

……虚無……

……幻滅……

すすけたガード下のはり紙「こみ捨てるな」
すえたリンゴの香り。
やせ大の彷徨。
毒だみの赤い葉裏。
黒猫の眼。

新しい朴園の乾いた音が、
澄んだ空気を沈うつにふるわせて、
お前の耳と星空に吸い込まれる。



☆ 随 想 ☆

未来に向つて

三年E組 平野一子

今年も又、春と共に校門にさよならをする
季節が来た。私はなぜか過ぎて行つた日を懐
しく思わない。それ程に残るものがなかつ
たせいにか、それはなんとも言えない。

しかし、変にしんみりと懷しんでみても仕方
のないような気がする。だがその中から幾つ
かの思い出をたぐりあせるのだが駄目である
そうするには、あまりにも私の心はあわた
ましい。
私は今迄自分の心の中で、このめまぐるし
く移り変わる世の波に心いっぱいの抵抗をしな
がら努力をして来たつもりだが、果してそう
であつたかどうか不安になる。

この間読んだ阿部次郎の「三太郎の日記」
に——貧乏人の創造は金持よりも酷しい試金
石にかけられている。——中略——併し生育すべ
き魂にとっては、もとより貧乏と金持の差別
がある訳はない。——とあつたのが思ひうかべ
られる。この貧乏人、金持ということを生
きていくことにおける条件の優劣にあては
めて考えてみると、人は自らの環境に強く足

を踏みしめ、そこを認識することから、生き
る可能性を広げ、戦い、努力出来るのではな
いだろうか。
今の世の中は確かに悪条件に満ちているよ
うな気がする。若者達は皆、ふら／＼として安
定しない。煙草をふかして麻雀屋で夢中にな
っている角帽の群。こんな事をした後、きつ
と心の中は空虚で、ひもじいに決まっている。
何という無駄な馬鹿げたことだろう。

時代の流れは激しいイデオロギーを要求し
てゐるのを、私は知らないわけではないが、
どんな立派な主義主張であろうとも、豊かな
人間性を欠いてゐた時には、人間を破壊する
という事になるのではないだろうか。
私が自分一人で世界を知っていると思つて
いても、ほんの周囲だから、まだ／＼甘いか
も知れない。これから世の中に出て自分の力

だけで、独立して生きようとすることは、私の思ったよりなまやさしくはないであろう。しかし、それにぶつかってもそれは終点ではないのだ。「東洋の詩観」はなるほど美しいかも知れない。しかしこれは敗北の美しさではないだろうか。私達青春を生きぬこうとする者の考えるべきものではないと思う。

私達はこれから先、何が真実なのか迷うであろう。しかし、私は自分の魂をまっすぐに伸ばして行くことが出来る生き方こそ真実だと思ふ。それが結果として敗北に終わったとしてもそれでいい。

高校生活を終えて、私が新しい社会に飛び出す時、何かひとつにかじりついて、悔いなく夢中になってやって行けるものがほしい、明日の活動力を養う様な。

八人の友達

一 E 中川 敏子

友達——友達とは私達にとっては最も大切なものである。困難や悩みにぶつかった時、黙って救いの手を差し伸べてくれるのも友達ならば、楽しいおしゃべりの相手となってくれるのも友達である。

現在のわがクラスの女子は九人、すべて親

しい友達同志、従って一人／＼が八人の親友を持っているという寸法になる。私達はほとんどの場合一体となって行動する。もちろん下校の際は必ず一緒、稀に一人が遅くなる時があるが、そんな時でも余程の事情がない限り待つ事にしている。今ではまったくこれが習慣になってしまった。この様な事は極く甘い幼稚な考えであるかも知れないが、私達にとっては、いいようのない喜びであり一種の誇りさえも感じている。少い人数であればこそ、このような事が可能であるとすれば、そしてそれを自覚すればする程、何かしら満ち足りた気分になる。

入学当初は、人数の少い寂しさと、趣味や性質のちがいが等から来る矛盾は、どうする事もできなかったが、ただ一つ、皆が、殊の外消極的である」という事が不思議にも一致していた。こんな一致が「皆を固く結びつけた」と言っても決して過言ではないと思ふ。つまりは社交性」という事に対して幾分欠けていたと考えられる。そのため残念な事にクラスクとしての統一性が感じられない。同じ教室で勉強しているのに、男子には遠慮してしまふ事が、往々にしてある。何か取りつきにくいものを感じさせるのも、人数のアンバ

ランスから来るものとすれば無理からぬ事であらう。

「私たちのクラスみたいなク、原形質分離クっていうのねきつと！」等と言ってよく笑ってしまふ。まったくそんな気がする。しかし原形質分離であらうが何であらうが、九人の女子が固く結ばれている、という事で十分満足している。

つい最近——といっても、もう去年になるが、そう、十一月の終り頃であつたらうか、冬の声をすぐ耳もとで聞くせいか、幾分肌寒さを感じさせたが、私達は、かねてからのプランを実行した。それは、放課後——この日は土曜日の午後——近くの牧場に写真をとりに行く事だった。用意したカメラと、売店で求めたパンとをぶら下げて牧場へ向かった。緑の芝生に円陣をつくり、新鮮な空気の中で食べるパンと、牛乳の味は、ホコリっぽい教室で黙って食べる味と、どれだけ違ったか……。

皆は顔を見合せては笑った。誰も居ない広い牧場で、思ひ／＼のポーズに、次々とシヤッターを切った。そして、「卒業まで必ず一緒に」と誓ったけれど、どうやら今度のクコース選抜で、別れてしまふそう。これも

趣味の相違性質の相違に基づくものとすれば、真に妥当ではあるが——何はともあれ、「八人の良い友達」を得たという事実は、今後の生活に必ずプラスになつてくれる事を信じて疑わない。

受験勉強

——卒業に当り

後輩諸君へ——

三 D 奈良 茂男

月日のたつのは早いもので、このあいだ高校生になつたばかりだと思つてたのが、もうその高校の卒業式を目の前に控える身となつてしまいました。人格完成への一段階である、高校三年間を顧みて、想い出として残るものは何だろうか、考えた時、結局は何も残らなかったというのを、つく／＼感じているような有様です。ただ、目の前にぶらつく「大学受験」ということを目標に、高校生活を送ってしまったといえ、それまで、すく「大学受験」この言葉は、私の耳にはたこが出来る程聞かされて来た言葉ですが、いまだにはつきりと自覚したことはありません。まだ本当の入試（三月三日・四日）を受けたことがないからかも知れません。でも高

校生活を終るに当り、われ／＼高校生の直面している最大の関心事であるこのことについて、少々自分の感じたことを書き残して置くのも決して無駄ではないと思ひ、又在校生の諸君にも何かの一助ともなればと思つて、ペンを執つた次第です。

高等学校は「大学の予備校」とか、又「灰色の生活」とかよくいわれています。ひとえに今の大学受験の激烈さを物語るものでありましよう。そも／＼こんなに苦しんで、大学へ入らねばならないのはなぜでしょうか。それはたゞ人口過剰といえるのかも知れませんが、こう人間が多くては、いくら何でも優秀な大学へと受験生が集るのも無理はありません。したがって一流大学への門は一年狭くなり、雪ダルマ式にふる浪人は巷に溢れ、現役受験生は小さくなつてくるような有様です。しかしこんなところで、今さら私などが不満を述べてみたところでどうにもなりません。われ／＼はこの狭き門を通り抜けねばならないのです。たゞそれだけが自分に課せられた責任であると信じています。ではその得策は何かと言へば、それはたゞひたむきな努力なのではないでしょうか。人間は努力をせずして大成することは決してないという

ことを、私も強く信じています。しかし私もまだ受験生です。晴れの栄冠を得たこともありません。したがって大きなことを言えないかも知れませんが、こゝで自分が三年間を過してきた、本校における受験勉強態勢というもの、を少し批判してみたいと思ひます。少々苦言になるかも知れませんが前もって御許しをお願いします。

さて一口に言つて決して本校のそれは満足なものではなかったということです。生徒の学究的態度は、一、二年の時はおろか、三年の今でさえ、依然天下泰平といわんばかりの有様です。自分でこんなことを書くのは自分に対しても少々痛いところがないわけでもありません。しかしそういうことにはつきり気がついた今、後輩諸君のためを思つてであります。一年の時から心構えが大きく後で支配するということを忘れないようにして下さい。授業の雰囲気から、又環境から私には不満だらけの高校生活であつたような気がします。いや私ばかりではありません。こういうことを感じている三年生の諸君も少しはいるということです。しかしこれでは余りにも情ない気持がします。もっと学校の気風というもの、が、引き締つたものになつてもよいので

はないでしょうか。もっと「松高は自分の母校だなあ」という気持ちが強く心に残るような学校にしたいものだと思います。これまで以上に……緊張した学生気分が出て、良いのではないのでしょうか。一つには、本校は新制高校であるため、いろ／＼うまくない点もありましようが、それ故にこそ、現在のわれ／＼が大切なのではないのでしょうか。大学入試は刻々激しくなる時、これに勝利を得るには、何よりもまず、強固な意志を持つことだということを感じております。この強固な意志は力強い学校の背景なくして築かれないうこととす。

以上は気持及び雰囲気の問題であります。次に実際上の受験勉強というものを考えてみたいと思います。私が常に悩んだことは、学校の授業と、自分の家での勉強とをどうマッチさせるかということでした。しかし卒業を目前に控えて、始めてわかったのであります。が、やはり一、二年の頃は学校の授業を真面目に受け、本当の基礎学力を充分つけなければならぬということでした。このことははっきりと言って置こうと思います。自分はいわば三年間の学校の授業を十分に活用しなかったような気がしますが、後輩諸君はそんなこ

きまず。

すくらん

一B 山田美津子

空は晴れて美しい青空の日曜だ。

机の上のすくらんの花が、なんともいえない香りがした。今頃スズラングループの人達は、何をしているだろう。仲良し九人が揃ってハイキングにも行った。機関紙「スズラン」を発行した時の楽しさ、校内でも校外でも模範だったグループ……。

机の中から小さなアルバムを取り出して開けてみた。あつた／＼懐かしい友達の姿が……。真中にすくらんの花がある。だが、残念にもそれは造花だった。あんなにすくらんを愛していても、造花しか求められなかった。毎日すくらんを夢にみて勉強に、運動に、活動に励むグループの人達は、本当に幸福だったと思う。

目をつぶると、寒い北の国の広い野原の、咲き乱れたすくらんの中に、友人八人の気高い清らかな姿が写って来る。鈴がカラコロンとなつてゐるののように見える。白い小さな

とのないように、十分に授業を活用し、本當にがっちりした土台を築き上げてもらいたいと願っています。基礎学力なくして、いくら高度の参考書や問題集にぶつかっても、結局は自分の実力が不安になる一方だということをつく／＼感じています。ましてや校内模試とか、殊に校外の模試などを受けた時、痛切に感じます。私は今になって「急がばまわれ」ということを身にしみて感じているような有様です。これは完全に今までそのような授業の空気にのまれ、強固な決断力を持たずに来た自分の過失だと思っています。又こゝで先生方へ一つお願いしておきたいことですが、それは、もっと受験的な授業をやってもらいたかったということです。成程、受験々々で高校生活を送ることは、学校教育の目的から大きく離れるかも知れませんが、でも結局われ／＼に対し、最も幸福なことは、一流大学の門をくぐることです。その受験勉強そのものが貴い人格完成への最短距離だと信じています。

前にも言ったように、高校生活は灰色の生活々々なもので、よくいわれます。しかし私は決してそうではないと信じています。若い時代にある目的へ向って、日夜努力

するということは、非常に貴いことであると確信しています。この受験勉強が決して長い人生に、マイナナになることはありません。それを立派に証明している人は本校卒業生の中にも少数あります。すなわち一流大学へ入った人々です。私は誰よりもその先輩を尊敬したいと思っています。

頭に思いつくまゝに、ペンを走らせてきたので、余り立派な文でもなく、立派な論文でもなさそうな気がします。案外こんなことを書きながら、自分自身に言いにかけているのかも知れません。私だって天下の受験生ですから。この私の一文を最後まで読んでくれた諸君が一人でも居れば、それで満足です。たゞ文芸雑誌「くる」には誠に不似合な文が出来てしまったことをお詫びしたいと思ひます。でも三年間おっべされたような気持で送った高校生活を終るに当り、その不満を少しでも開放させたような気がします。私もまだ受験生です。何も知らないものが、先のような大それたことを書いたことをお許し下さい。今はたゞ一途に目的の大学へ向って突進する気持で一杯です。そして大学生活を夢見ながら……。

では在校生皆さんの御健闘を祈って筆をお

天使のように……。幸福を入れた九いつほみが、平和の鐘を打つのだろう。この美しいすくらんを見ていると、北海道の野に今咲いているスズランの花には、夜はお星さまが宿るのではないかしらと思える。もし蝶がとまるとしたら水色の蝶ではないだろうか。

今、机の上のすくらんは何を考えているのだろう。寒い北のお国のこと？それともお母様のこと？お友達のこと？「スズラン」気取っているんじゃないわね。なぜなら、あなたの九い鈴からは柔かい優しい音が聞こえて来ますもの。聖母マリアが真白い着物を着たかのように、清く美しく優しい姿。じつと見つめているとすくらんの中に、自分の魂が吸い込まれてしまふようだ。友の姿が浮かんだり消えたり、いろ／＼の風景が、かわる／＼写ってすてきな幻映画を、自分は見ている。

目をつぶると不思議な音楽が聞こえて来る。その音は、遠い／＼所から聞こえて来るようでもあり、すくらんの鈴の奥から聞こえて来るようでもある。

あゝ、世界中のどこに、こんなに美しい落ちついた音楽があるだろう。悲しいことも

淋しいこともみんな忘れて、心の中をすっきりと、この音楽の風で押えられるこの気持は私にとって最大の幸福だと思ふ。

すくらん／＼すくらん／＼、白いすくらん／＼ふとわれに帰りを外を見ると、白い洗濯物が、バク／＼なっている。窓を明けると春らしい風が、すう／＼と入って来て私の髪を持って行くこととする。私は机の前から、そつと立ち上った……。

父

二B 古川 紘一

本當に乾き、つてしまった一ヶ月余、空をながめては、今は降るか、明日はくずれるかと、雨や雪を待つという寒に妙な今日この頃である。やはり冬は雪、北風の季節である。近頃の陽気では、どうも冬の感じが全然しない。こたつで、みかんを食べながら、北風がビュー／＼と吹く真冬の景色を、空に描いていると思わず胸に浮ぶのは、次の事である。

☆

午後四時頃であった。冬のこゝろ、とてもはやうす暗くなっている。がらんとした駅構内

は、寒さを倍加させている。発車の時刻が近くなつた。

「もう帰つてもいいよ。寒いだろう。父さんはホームへ行くよ。……野球のバット欲しいんだろ。これで買うといい。」そう言つて、かじかんた僕の手を、二百円つかませた。暖かい手だった。

父はそれ以上にも言わずに上り線ホームの方へ消えていった。淋しかった。

「今度は、いつ来るんだろう」

僕は、「サヨナラ」の一言さえも言えず黙つて、しばらくの間、そこに立っていた。

☆

八年も前の話になるだろう。僕の家は、当時父を一人東京に残して群馬県前橋にそかいていたのだ。父は、二、三ヶ月に一度、前橋にやつて来た。それも勤めの都合上、長い休みのほかは、土曜、日曜を利用して来るのであったから、家にいるのは、ほんの少しの間であつた。でもたとえ少ない時間でも、僕にとつたら、とても、うれしく楽しい一時だった。

ある時など、夜遅くやつてきた。僕は、その時もう床についていたが、母に起こされた。父の顔を見ると嬉しくて、まだ夜中と

知りながら、起き出して、歯をみがきだしたことがある。その晩は、空一面星が光つて、実にきれいだつたことも覚えてゐる。今考えてみると、実にオカシな話だが、……

きかつた原因かと思ふのである。
☆
コタツに入つてミカンを食べながら、描いた思い出の一片である。外では、久しぶりに雨が落ちてゐるらしい。

就職

——思い出すま——

三A 国田光子

近くに利根の清流が横たわつていた。その河原は学校友たちとよい遊び場所だった。父が夏の休みにやつてきた時など、いの一歩に利根に引つぱつていって、水を浴びたものだった。父を想い、一日も早く一緒に暮らしたいという気持は、学校における作文、詩、俳句などにも、よく表われた。

秋の夜東京の父思われるなど今も忘れられない。当時の句の一つである。

そんな生活にも、やがて終止符をうつ時が来た。小学校五年生であつた。

東京めざして進む車中の僕の気持は、いともたつてもいられない、という言葉がはつきりと、あてはまるようだった。

家族が皆一緒に同じ屋根の下で暮せるようになってから、もはや六年になる。

どうやら物事がわかりはじめる頃から離れた生活を始めた。父への慕情があまりに大

莫然とした希望を持った就職に対して、自分が少々愚かしく哀れに思えてきた。一度や二度の失敗で改めて卑下する訳じゃ決してない。たゞでさえ、劣等意識に悩む私は絶えずそれ故に卑下してはいたにすぎないのだから。そんなある日、筆記試験の通つていた某銀行から出頭命令を受け、面接というものに生まれて始めて行つた。まずうす暗い、見るからに陰気な空気のしみ込んだ地下室に入れられ身上調査を書かされた。年令、氏名、住所、通勤する場合の駅名等はサツとかたづけろ。その下に家族の調査欄があり、職業を記入する欄がある。口の上では労働は大層神聖であつても、それはひと昔もふた昔も前の話、口先はとく便利的であり過るようだ。

父も兄も似たような職業であれ技術者であつてみればこそ確かに誇れる職業であるのを自分言ひ聞かせる程に気休めであり、社会の矛盾が善良なる市井人の上に乗である事を痛感する。又自覚せる長所という所に明朗と書き、もひとつ、けたし、短所には自分を眺めれば事欠かないので、つい本当の事を書いた。ドライでない事も証明しとけば良かったかな？その他細々と趣味、疊数等あつた。私はいわゆる嘘をいう人間であるのを感じる。

虚無がおそろ。いやだ、いやだ面接なんてまづびただけでこの課程を通らねば使つてもらえない社会である。一人ですべてみても誰が振返ろう。容赦のない世の中に飛び込むには相当の心構えが必要なのはすだ。

——これは去年の事である。結果は、はつきり言おう。厳選な選考の末、残念ながらという文面の印刷物は佻しい音をさせたきり二度と振向きはしなかつたのである。

私はこの事を中学時代の友人に書き送つた。次のような文面であつた事を記憶する。

この前話した奴を、やつぱり落ちた。やつぱりなんて言うとなあなたに又、叱られるかも知れないけれど、要するに仕方がないんだヨ。落ちたんだもの。あなたがこの前言つたように自信を持つてすれば、結果はあるいは変つていたかも知れない。だけどあなたも知つてるように悪条件が御膳立て、実力もだけど、父の身一つじゃあ……

自信なんてもん最初からなかつた事白状するね。情けなくなつたのは確か。私みたいな甘ちゃん、就職しようなんて欲張つたのがい

けなかつたのかしらん。だけど、私どうしてもし中小企業には入りたくない。唯一の望みだナ。やつぱり見栄つぱり？ 違う。意地つぱり……

社会と会社、似てゐるね。土台はお金だもの矛盾を肯定出来るのは妥協と違う？私、自分の心にはずいぶん嘘つきだけど——よくわからない。はつきりわかつてゐるのは落ちた事実。何でも落ちるのは情けないもんじやないかしら。

ありきたりの慰めなんかごめんです——云々。折返しの手紙は思つた通り三日で着いた。

文面は女の子ながら「馬鹿野郎!!」余り自惚れもいゝ加減にしたらどうです。誰が慰めるもんですか。あなたみたいに自分勝手な人

自分は少くともあなたより三年も早く社会に出て多少の経験は積んだつもりです。あなたには本当はまだ学校に行つて欲しいと願つていたのですが、この前会つた時、就職する事を聞き、それなら自信を持つて誇りを持つてやれば良いでしょうと言つたまでの事ではありませんか。

社会の矛盾なんて、ずいぶん大きいようで細かい無限のものなのよ。偉そうに言うけれ

になると、クルミの木の下にござを敷いて昼寝をする。蟬の声が子守歌のように聞え、時時吹いて来るそよ風が楽しい夢を誘ってくれた。

そんなある日、ある家に泥棒が入って、大騒ぎをした事もある。クルミや、お米の干しであったのを取られたのだそうだ。そして、村中が大騒ぎをしたものだから、その泥棒は田んぼの中に隠れたり、追いかけて行く大人の人達に、石を投げつけたりしていたが、とうとうつかまってしまった。その時の泥棒のシャツも靴も泥だらけ、でも、田舎の人は人情があるのか、その泥棒のシャツを洗ってあげ、火をたいて体を暖めてやったりお菓子等を買って来てあげたとか、その事を聞いて、私はなんだか涙の出るような気持ちであった。だが、その後が大変、田舎という所は話題というものが無いので、いつもいつもお茶のみ話はその泥棒の事、なんだか世間が小さくなったように感じた。

このようにいろいろな事があつた一九五六年も後十日あまりで終ろうとしている。来年も一生懸命頑張ろうという気持ちを深く胸におさめて、いつも新しい気持ちで進もう。

(一九五六年十二月記)

父の故郷に行つて

三A 高橋由喜子

一昨年の夏の事でした。十七時間もの長い間汽車に揺られて、くたくたになつて着いたのは夜の鳥取の町でした。初対面の親類の人は駅に迎えに来てくれました。駅前広い通りを、従姉妹と弟と私の、三人は説明されながら、汽車の疲れを感じていました。鳥取市の中では大きいといわれている時計店を持つ親類の家に着くと、「汽車が長うてえらかつたろうなあ。」と迎えてくれました。その晩、私は三階の部屋で旅の疲れを休めました。

翌日は市内を散歩。県庁や郵便局、銀行などを中心にして割合に広い通りが縦横に走っています。市街と云つても自転車ですぐ端まで行ける位ですから、バス、自転車は盛んに利用されても、電車はまったく有りません。従姉妹と映画を見に行きますと、映画館の前にビカ／＼の自転車が数十台ズラツと並んでいました。「貸間」などという貼り紙も見られませんでしたし、奥さん連は夕食後、小学校のコーラス会に出かけたり、とにかく、のんびりとした豊かな生活の様に見受け

られました。祖叔父——(私の祖母の弟)——の息子達は、祖叔父とその長男の住む二階町の近くに住んで居て、私は挨拶して廻りました。その息子達——(私から云つて叔父さんと云いましうか)——はそれぞれ駅前のデパートの時計部に勤務したり、歯医者さんを開いていたり、時計商を営んで居たり、私達より余程電化された生活をしている様です。その叔父さん達に案内されて鳥取の名所に参りました。一番興味深かったのは、有名な鳥取砂丘で、広々と続くその眺めは、「遠く離れた」感じを深めました。

× ×

その日の午後、私は叔父と共に、バスで砂丘の登り口まで参りました。緑の松の木の間を縫って登り始めました。じり／＼と照りつける太陽に熱せられて砂の上をはだして歩くことさえ出来ません。なか／＼はかどらない歩みを、大きくすると、かえって手応えのない砂と共にずり落ちてしまいます。砂に反射する日光のまぶしさに目を細めながら、私は額に汗を流して登って行きます。下駄にたまる砂をパツ／＼と払い落しながら、私は意外に疲れを感じました。時々生えている植物は白っぽい、きらきらと光る砂・砂・砂の

中に緑のうるおいを置いています。海からの風に砂が波状に(ちようど干潟の様に)ふきつけられて居て、その美しい模様を私達の下駄でこわすのは惜しい気持ちでした。

砂丘の高い所に来た時、眼前に、それこそ絵に描かれた様な海が、展開されました。車中で見た日本海にもまして、砂丘上から見た日本海の美しさ、それは砂の白と、松の緑と、海の青と、私達は言葉もなく、そしてたちつくしました。

「来てよかった。」そんな事を思いながら写真撮って頂くと、登って来た反対側の砂丘の急坂を、砂と一緒にざ／＼と滑り落ちながら、バスの停留所までおりました。

その晩、あの感動と潮の香が消え去らない中にと、それらを日記帖にそつとしましました。

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊

歌舞伎小談義

二B 中島清徳

どういふものか小生は幼い頃から日本舞踊や長唄等がたまらなく好きだった。難かしいことはわからなかったが、それでも小学校三年の頃から歌舞伎を見たいという気がしていたし、又家の人からそれ等の話を聞きだすことが唯一の楽しみであった。今でもそれは変りないが、歌舞伎に対する感じ方がいくらか成長して来たような気がする。もっとも青二才の小僧の言うことであるから、たいして信用も出来ないのだが。一口に歌舞伎と言っても範囲が広すぎるので歌舞伎とは切っても切れない日本舞踊について、小生の知っている範囲で大いにしゃべらしてみよう。(大いになどと言つてもほんの上皮しか知らないのだが)現在日舞の流派は数多くあるが大きいところでは、「花柳流、藤間流、西川流、坂東流」その他といったところである。この中で藤間流家元の尾上松緑、坂東流家元の三津五郎は歌舞伎役者で日舞ばかりではなく俳優としても一流である。又、花柳流は寿輔が家元で、今の寿輔師匠は二代目にあたるそうであ

る。この流派は吉原の台屋魚吉の養子で七代目団十郎の門弟の市川鯉吉が始めたもので、後に振付師になって、七代目から花柳寿輔の名をもらつたといふことをなんかの雑誌で読んだことがある。新派の水谷八重子も花柳寿という名をもらっているのは知る人も多いところである。その他、中村流は歌右衛門、西川流は鯉三郎が家元であるが、それ等の流派についてはあまり明るくないので、くわしく説明することは出来ない。

こゝで過日わが校の芸能祭にたよひとつ出された「藤娘」の話をしてみよう。これは浮世又平のえがいた大津絵のうち、藤の花をかたがた娘の姿を舞踊化したものであり、文政九年九月中村座で二代目関三郎が初めて踊ったものらしい。大津絵の舞踊の中、藤娘は極く短時間で舞踊の温習会などで素人の人が踊るという程度の軽い扱いを受けていたのが、昭和十三年三月故六世菊五郎が初めて踊るについて、故岡鬼太郎氏に依頼して「藤音頭」の件を加え、舞台装置にも新工夫を凝らして上演したものだそうである。なお「藤音頭」は、若い娘の醜態を見せるのを狙いとして踊るが、これは、藤の根に酒を注ぐと立派な花が咲くという事実を基に作られた

ものだといわれており、この酔態の振りが、菊五郎の名演技として特に好評だったとは、小生、人に聞いた話である。現在この遺録を継いでいるのが音羽屋の養子の梅幸である。

今でも照明や舞台装置は菊五郎のやった時と余り違ってないというものであり、最初真暗になっていて急に舞台が明るくなり藤の木のかげから藤の花の一枝をもって藤娘が出てくると瞬間ハッと目を見はらせ、しばしうっとりさせる。歌右衛門の方は梅幸のそれとは又違った振りでである。藤娘の原曲は出からグドキ・踊り地という簡単なものであるが、安政頃から踊り地の前へ「潮来出島」を三つ四つ加えるのが型になったと五六年前の「演劇界」で見たことがある。歌右衛門の方は四つの潮来のうち初めとしまいは普通で真中二つを早いテムボの旋律に変え合せ方を新しく加えるといったような具合であるが、梅幸の方は先にも述べた通り、六代目がその潮来を嫌いな新作の音頭を三つこしらえてこれを中心とした踊りを受けついでいるので、そこに二人の違いがあるわけである。

さて話は藤娘のことが大半になってしまいました。その他数多くの作品にも突っこんで味わったら本当のよさが解ると思います。

た。本質と作った人格とはさまれて、網に入った魚がもがけばもがく程網にからまるように、どん／＼深い溝にはまりこんでいってしまうように感じた。

このような僕を、彼女はさけるようにして、どん／＼遠いものになってしまいうように感じた。

僕が学習で、あるいは運動で、皆の成し得ないようなことをやった時、彼女が僕を讃嘆してくるのを、顔がほてるほど素晴らしいと感じて、心の内で歓喜した。

一方、それほど感じながらも、何か威圧を感じて、近すぎ難い彼女に、考査では、いつも僕が上まわっていた。そういう時は、優越感を感じて、彼女をすごく劣っている、つまらない人間と心の内で大いに恥しめると、溜飲がさがるのを覚えた。

校内対抗の時、僕はいろいろの種目に参加して活躍した。試合中に、彼女がゲームを見ているのがわかると、僕はなぜかほっとしてがぜん試合に張りがあるのを感じ、華々しいプレーをやった時は、彼女に対し誇らしい気持ちでいっぱいだった。

は、なんですか？高校時代はそんなことよりも勉強をしるですって。いやごもっとも。それではこの辺で小生も退陣させていただきます。しょう。

思 い 出

一E 笹岡 治男

思い出——それはあんずの味の紫のかすみにつままれて、柔らかに汚れない乳色にかなんだ泉のようなもの。

それは、ひとりぼっちで淋しくて、何かに話しかけたくて、たまらない時に飽和に達して、紫のかすみを浸透して流出する。

それがある時は懐かしく、少しずつもったいをつけて、自分自身の目を細めて、うっとりと見とれ、ある時は、それに唾をはきかけて罵倒して、その源泉をどろ靴で踏みにつけて、後で何もない暗闇にひとり取り残されて、寂々としたものにつままれて虚脱する。

それがゆっくりと燃えあがって、自然と展開して、うすらいでいったのを恍惚と見とれる時、ふみにじって胸が悪くなり、目まいがして、目の前がまっ暗になった時でも、しばらくして、けだるいような何かを感じる。

文集を作った時、一緒に編集したが、彼女にだけは、まともに顔を合わすことはもとより、口を聞くことも出来なかった。しかし、下校時刻までねばって、うす暗くなった家路を、彼女と一緒に編集したグループとたどる時は、何か心がうき／＼して、最も楽しかった。

中学二年も終りかけて、いよいよ三年になるという時になって、僕は、三年のクラス編成に不安を感じた。——彼女と一緒に進級したい。僕は、クラス編成が発表になるまで毎日、一緒に進級出来るようにと、ひたすらに考えていた。

三年の新学期が始まった最初の日、新らしいクラス編成が発表される。

発表が校舎の壁に張り出された時、僕は不安でどき／＼と心臓が鳴り、耳もどで、ピー／＼と何かの音がうなり、顔がほてるのを感じた。僕は食い入るように、それに見入ったが、一瞬、重いつちが打ち降ろされたのを感じた。何か／＼とまわるように感じて、全身力が抜けて虚脱の状態に陥ちこんだ。はたして、僕が心配していた通りになってしまったのだ。——彼女と僕は同じクラス

中学校の二年生の時、僕は同じクラスの一女生徒——仮にAさんとしておこう——に何か、心あたたまるようなものを感じた。

小柄で髪をきっちり束ねて清潔な感じのするAさんは特に眼が美しかった。又、声も清澄で美しかった。別に派手な服装をするのもなく、特別な振舞をするのでもないが、誰をもひきつける何かを持っていた。

その時、僕は彼女に近づいて何か話をして見たいものだなあと思ったが、他の人の手前もあるし、いざとなると、彼女が非常に高くて、自分がひどく劣っているように思ひこみ、氣遅れがして言葉を切り出すこともできなかった。

彼女にそのようなものを感じてから、僕は少しでも彼女の目に好感を持たせるために、特に粗野であった態度を敬虔にして見せた。意識してこんな浅薄なことをするのは、もとより僕の本質として無理なことであった。態度を改め、礼儀を正したために、かえってちぐはぐな、おかしい奴になってしまつて、恥しい多くの失敗をやらかし、自分自身をどう処置してよいのか分らなくなつてしまつた。

ではなかったのだ。僕は、たゞ涙が出そうになるのをこらえるのが精一杯だった。

それから数日間、何にも手をつけることが出来なかった。

あれほどまでに、彼女に感じていた僕であったが、新学期が始まると、気を取り直して、翌年に控えた入試の関門を突破せんがため、勉強に没頭した。そして、彼女が僕をしめる割合は、だん／＼小さくなって、ほとんど忘れはててしまった。

僕は入試に失敗して、再度、失望のどん底にたゞきこまれた。そして、しばらくの間、魂を失った人間のようなであった。

しかし、気持がやっと落ちついてきた時、Aさんは某都立高校へ入学したと聞いた。

そして、小柄で髪をきっちり結った、清らかな女学生を見るにつけて、Aさんを懐しく思い出す。

親しい交際も、もちろん、まともに会話さえしたことのない彼女に、このようにいつまでも感じるのにはなぜだろう。

思い出は美しく、哀しいものだ。そのオルゴールが鳴り出す時、なぜか、僕は物悲しくなり／＼と胸が痛むのを感じる。

我が高校生活の

思い出

三D 吉村和洋

私が松高に入学した当時はまだ、校舎も設備も実にお粗末なものであった。もちろん中央廊下などはなかったし、今の家庭科の教室も未完成であったように記憶している。しかしそんなことは私にとってどうでもいい事であったから、はつきりした事は覚えていない。たゞ私が最初に知ったのは大学の入学率であった。当時私は東大進学を念願として、何にも知らないまゝにいつの間にか松高の帽子をかぶるようになってしまった。どこからともなく耳に入ってきた事だが入試合格率は余り良くないとのこと、その時私は少なからず失望したものだ。これは私が世間一般のいわゆる一流校で普通に勉強していれば東大など決して恐れるに足りないところだといった甘い考えを心のどこかにもっていたからかもしれないが失望した事は事実である。

私が田舎を引き揚げる時、中学時代の恩師に「必ず東京の学校でトップになります。」と誓ったので、とにかく松高ではそれからやってやれと思った。

その頃、私の一家は全部が東京に出て来ていたわけではなく、私自身下宿的な生活を送っていた。学校から帰ると津田塾に行き、夕方帰って来て自分で夕食を作って食べていた。それから毎晩午前一時半頃まで勉強していたのだから今からみれば実に勉強家だった。こうしてやっと東京の生活に慣れた頃、同時に二人の友達を得た。三人は日に／＼緊密の度を加えていったがこれらは決して遊びの友ではなかった。お互いに励まし合いながらも心の中では火花を散らしてトップ競いをしたものである。結局一年生の前期のトップはその友の一人のものとなってしまった。

—実力試験—

前期の成績を挽回せんと私は懸命だった。二人の親友もやった。そういう時は実際勉強が面白くてならなかった。そういう時に第一回の実力試験が行われた。期末試験とは違って快い感じがした。結局私と鈴木君が同点でトップになった。その時はやっぱり嬉しかった。クラスのトップよりも一年全体でのトップなのだと自分勝手にいろいろとこじつけて自己満足したものだ。

その後は実力試験のある度に私はトップの座を占める事が出来たが、同時に今度は試験のある度に何か重苦しい気持ちになった。その頃の私は皆なに「トップにはトップの苦しみがあるんだよ。」と告白してみたくてならなかった。でも一年も終りに近づくにつれてそろ／＼私の曲った根性が顔を出し始めて「こんな一時的な感激に酔って苦しまなければならぬ」とは情けない話だ。そんな事よりも第一おれは一般常識なんてぜん／＼覚えてないじゃないか。」と考えさせるようになった。

それでも二年生に進級して最初の実力試験には平均八割弱の好成績でトップになった。しかしそれが私にとって最後の花となった。その後は益々適当に稼いでいけばいい、という考えが強く私を支配するようになって成績は落ちる一方となってしまった。今どんなにりとくえそうとしてもだめなのである。あの当時に懐しくてならない。しかし特に後悔の念が湧いて来ないのはどうしたわけなのだろうか。

—進級—

私が二年生に進級する時、本校はじめての受験クラスたるアルファクラスが組織される事になった。学校側の手落ちもあって大いに私達の反感を買ったのだが、それでも強制

してしまった。この時私の無二の親友であつた酒井君と別れなければならなかった。何につけても一緒で私の心を支えてくれたその一端を、今現実の矛盾に対峙するために私からはぎとちうとしている学校が、私に堪えられぬ憤怒の念を起させたのである。「いつも正しいもの、美しいものを求めてやまない若人の心にかくも無惨な傷を負わせるのか、なんというむごい事をしてくるのだ。」と残念がったものである。そして今は三人ともばら／＼である。人間とはこれ程までに残酷なものなのだろうか。しかしお互いが何んの干渉もないで自分の道を歩む事、お互いが全く無責任に自分の道を歩む事、そういう事が人間の最も責任ある交際かもしれないが……

—新聞部—

二年生の後期だと思ふが私は新聞部に入つた。私は父が毎日新聞に十年も勤めているので新聞の仕事は小さい時から見ていた。前からの活発な仕事が好きだった。それに「学校新聞を私の手で動かしてやれ。」という野望をもつて臨んだので結構楽しかった。たゞ当時の新聞部の顧問が室岡先生であり、私達の書く記事はいち／＼先生の検閲を受けなければならなかった。しかも学校側に

不利な事があれば削られてしまうのがどうしても不満でならなかった。しかし又、編集の時は愉快だった。今農大にいつている浜中委員長を筆頭に皆なひとくせもふたくせもある人間ばかりがそろっていたから出版関係になつてあわてゝ編集を始めるのが常だった。それでいて急いで記事を書いてしまおうというのでもない。冗談を飛ばして一同を笑わし夜十時を回る頃からやっとあわて始めるのである。すると例の夜警の小父さんが怒鳴ってくる。彼はいつもサングラスをかけて神経質な顔をしてやってくるので最初のうちは恐威

だった。それもやがては感じなくなつてしまった。その他に当時演劇部が練習の時、部費でソバを食べて暴露されひどく、かかれた事があった。しかし私達もそんな事はなかった。新橋の印刷所について校正などしているとやたらに腹が空いてくる。そうかといってポケットマネーがある訳でもないから自然部費で……という事になつてしまふ訳だ。しかもそれで結構うまかったのだから良心の呵責などというものは私にはないらしい。それでも今、私が新聞部に席を置いた当時から一番活潑に活動していたのではないかと自惚れている。

—修学旅行—

もう一つ私は二年生の後半に修学旅行委員に選ばれた。しかも委員長という大変偉いところに祭り上げられてしまつて困つたものである。都立高校初の九州旅行を試みようということに決定したから計画が大変な仕事であったが、それにもましてつらかったのは葉の作成であった。今までは原稿を作つて印刷所に頼んでいたのであるが、今年は一自分達の手で作つてみようじゃないかという事になつて、始まつたのであるが、まったくの難航を極めた。しかし委員諸氏の努力によって外観だけは立派なものが出来上つた時は私はやはりうれしかった。旅行中の思い出としては長路なのが少々興味があった程度であとは月並なものばかりだった。たゞこゝに一つ大きなことも楽しかった思い出があるのだがそれは公表出来ない。とにかく今、二年生が旅行の出発を間近かにしているのをみると私にも当時の事があり／＼浮んで来て懐かしい事しきりである。

—夏休み—

これは私が三年の時、つまり最後の夏休みであるが、私は休みを暑い東京で過ごすよりも思つて都下の五日市のある山寺に行つて過

した。お寺といっても本堂とかその他ちゃんとした部屋ではなく山門の二階なのである。山門といっても見たことのない人にとっては実感出来ないものであるかもしれない。

山門を定義するならば、周りが仏像で囲まれている最初のうちはこゝほど恐ろしいところはないが慣れてくるとこゝほど安楽なところはない、とでも言えそう。もちろん電気などあるはずはない。門の周りはお墓だし夜などは寝ているところも入り込んで来て旋回するのだから面白い。昼間は太陽が出ると飛び起きて机にむかう。寺でつくづくくれるご飯をたべる時間も惜しく思った。他に何も娯楽はなし夜は電気がないから勉強も出来ない（もっともローソクの光でやったがそれも限度がある）からして結局太陽のあるうちにやらざるを得なかったのだ。でも私に寺の生活を有意義ならしめたのは夜であった。歴史は夜作られる」でもあるまいがなにしろ夜は何にも出来ないものであるから床に入るしかない。しかし睡眠時間は十分なのだからなかなか寝つかれない。そこで私は窓からさし込む月の光にてらされながらい／＼な考えにふけるのである。幸福とは何か？ 自由とは？ 人間と社会との関係は？ などとまとまらない

までもとにかくいろいろ／＼と考え廻らした。そして一ヶ月の山寺の生活で私は考える喜びというものを見出した。金のない私にとってこれほど有難いものはない。たゞ不便という事は私には堪えられないものであったが、それ以外は実に良い経験だったと思っている。自分で自分を楽しむことが出来たという事は有意義だと考えている。

一 芸能祭

私の最後の芸能祭の時は私は語学部だったので私も合唱に出演することになった。しかし練習する段になって指揮者がいない。で私はあえてこの大役を買って出たのだが、これがそも／＼失敗のもととなり、かつ又、大変な教訓を私に与えてくれたのである。当日は一応自信をもっていったのだが、いざ合唱が始まって迷った。最初のたしか「麦畑」の時だったと覚えていて。途中でピアノとタクトとが合わなくなってしまうたのである。しかも合唱の声は小さいし、聴衆も笑い出す始末で私はすっかりあがってしまった。でもなんとかごまかして終ったが、次のプログラムがいけなかった。音楽部の女声合唱なのである。指揮者も専門家だから、私達の合唱とは雲泥の差である。自然に「俺達の合唱を見せつけ

るためにこんなスケジュールを組んだのか。」などと、とんでもない詮索までするようになつて、その場にいたたまれないような気分になったものである。何事も自分でやってみなければだめだとわかると同時に先日この世を去ったトスカニーニ（本年一月十六日死去、八十九才、フルトヴェングラーと共に二十世紀最大の指揮者といわれている偉大なマエストロ（編者註）の偉大さが無知なりに今さらながら感じられるのである。

高校三年、私は勉強しなかったとは言えない。誰れにも負けないほど勤勉であったといつた方が早いかも知れない。だが高校生活を回顧して先ず記憶に蘇ってくるのは薄暗い自室で本を読んだ事でもなければ、明るい運動場でスポーツに励んだ事でもなく、かえって以上に述べたような事柄である。しかし私はなにひとつ悔いてはいない。抑々そういう時であったし、またそれが自然であるような私の過去であった。すべては自然に動いたのである。私をこゝまで育てあげてくれた両親や先生方の期待にもかゝらず今大学入試を眼の前にして東大への希望も捨て去ってしまった。しかし願ひて吾が青春の一端に悔むところは無いと信じている。



Imensee

名作物語

テオドル・シュトルム原作

みずうみ

二年A組 児玉 典

幼な友だち

ラインハルトとエリザベートは幼い時から、遊んでいる時でも決して離れることがないほど仲がよく、一緒にすこやかに成長していった。冬は母親たちの狭い居間で、夏は森や野原で――。彼はおとぎ話が好きで、よくエリザベートに話して聞かせた。また、彼の持っている羊皮紙装の手帳をうずめている数多くの詩の大部分が、彼女をたゞえたものだった。その詩は単純なものだが、彼女への思慕が調べ高くうたわれていた。

森しとま深くしずもり、
乙女子のまみのさかしさ。
とび色のゆたけき髪に、
日の光流れまつわる。

ほと／＼ぎす遠方より笑めば、
乙女こそ森の女王の、
こがねなすまみを持てりと、
わが胸に思いぞうかぶ。

こうして、彼女は彼にとって、愛する少女となったばかりでなく明けをそめていく彼の生活のあらゆる愛らしいもの、すばらしいものの表現となった。

手紙

七年の歳月が過ぎ去った。ラインハルトはさらに上の教育を受けるために故郷の町を離れることになった。エリザベートは悲しかったが、彼が「僕は今迄どうり君のために童話を書いて、母への手紙と同封して送るつもりだ。ぜひ君の方でも感想を書き送っておくれよ。」と言った時、彼女はとても喜んだ――。

やがて、クリスマス・イブがやって来た。ラインハルトは母とエリザベートから贈り物と手紙をうけとった。彼はまずエリザベート

の手紙を開いた。そこには、彼がいないのでとてもさびしい毎日を送っていること、ラインハルトからももらった紅雀が死んだこと、彼の昔友だちのエーリッヒが、時おり訪ねて来ることなどが書いてあった。そうして「私自身を差し上げます。」と言って、エーリッヒが書いた彼女の肖像画も同封してあった。それから、母親の手紙も読んだ。読み終えたラインハルトはおさがたい郷愁におそわれた。彼はしばらくの間、部屋の中をあちこち歩きながら、低い、聞えないほどの声でくちずさんだ。

行き行けば迷いにけらし、
行きなすみなすみてあれば、
道のべに乙女は立ちて、
帰り道をさして教えぬ。

それから、ラインハルトはストーブの火をかきおこし、机に向って、夜どうし母とエリザベートとに宛てて、せせと手紙を書き続けた。

ふるさと

復活祭の休みに帰省したラインハルトを迎えたのは、すらっとした美しい少女になったエリザベートだった。だが、以前のように二人の間の気持はしっくりしない。二人だけにいるといく度か話かときれる。それが彼には苦しいので、何とかして話のときれを未然にふせようとあせった。そして、休み中なにかきまった楽しみを持つために、彼はエリザベートに植物学の手ほどきを始めた。

ある日、そうした目的をもって彼がエリザベートの部屋に入って

いくと、以前、紅雀を入れた鳥かごがあったところに、一羽のカナリヤの入った、金色に塗った鳥かごが吊してあった。それは一月前にイムメン湖の父の別邸を引き継いだエーリッヒからの贈り物であった。採集した植物の整理が終わった時、ラインハルトは今迄書きためた彼女をたゞえた詩をエリザベートに見せた。彼女はそれのお返しに「あなたのお好きなこれ、こゝに入れておくわ。」と言ってエーリッヒの花を手帳にはさんで彼の手に渡した。やがて休みも終り出発の朝、エリザベートは母の許しを得て、ラインハルトを駅馬車の停留所まで見送った。駅馬車は出発間際だった。彼は「僕は美しい秘密を持っている。二年たつて帰って来たら、それを教えてあげるよ。」と言って別れた。それから二年後のある日、彼は母からの手紙を受けとった。そして、エリザベートがエーリッヒと結婚することを知らず。彼女は迷っていたが母親の願いに従ったのだった。

イムメン湖

さらに、何年か過ぎた——。ある暖かい春の日の午後、ラインハルトはエーリッヒの招きでイムメン湖を訪れた。ラインハルトが迎えに出たエーリッヒと一緒に庭に入っていくと、そこには数年前と変わらぬエリザベートが立っていた。彼女は身じろぎもせず、見なれぬ客を見つめていたが、客が微笑と共に手を差し伸べると、「ラインハルト、まあ、あなたでしたの——。お久しぶりね。」とうれしそうにさげんだ。彼は「お久しぶりです。」と言ったきり、あとを続けることができなかった。

次の日、エーリッヒの案内で彼は畑やぶどう山、ホップ園や酒精工場を見まわった。そして、よく手入れがゆきとよい、美しい自然のなかで、彼らが豊かで、健康な生活をしているのを知る。それ

から二三日経ったある日の夕方、ラインハルトは彼が集めている民謡を披露してくれるようにせがまれたので、その中の何枚かを持ちだして来て、広間に集まっている家中の者の前で読みあげた。ラインハルトはまずチロル地方の俗謡を朗読しながら、ときにおもしろいメロディーを低い声で口ずさんだ。一座は皆晴れやかな気分になった。彼は別の紙片をとり出した。

母がねがいは君ならぬ
人にとつぎてあらかじめ
胸にちぎりしその人を、
忘れはてよと言ふなれど、
われには堪えじそのねがい。

母にむかいてつれなかる
母の仕打ちをなげけども、
さなくば清きこの恋も、
いまは罪とはなりはて、
せんすべもなき身の哀れ、

なべての誇りよろこびも、
消えて得たるはこの惱み。
あゝ、この憂目見んよりは、
乞食となりて土赤き
荒野ふみこえ去り行かん、

読んでいるうちに、ラインハルトは目た立ぬほどに紙片がふるえるのを感じた。エリザベートはラインハルトが読み終えると、そっと椅子をうしろへずらして、だまって庭へ下りて行った。ラインハルトはしばらくの間、エリザベートのうしろ姿を見つめていたが、やがて原稿をひとつにまとめて湖岸へ下りていった。岸づたいに歩いて行くと、湖上の手がときそうな所に白い睡蓮の花がひとつ見える。彼は急にその花をとりたくなったので、服をぬいで、水の中に入った。だがいくらか泳いでも睡蓮のあるところまでいけなかった。花は遠く寂しい深い深淵の上に浮かんでいるのだった。

エリザベート

次の日の午後、ラインハルトとエリザベートは、湖の対岸を散歩中、エーリッヒの花を見つけた。彼は腰をかきめて、地面にはえているエーリッヒを一つ摘みとった。そしてふたたび顔をあげた時、彼の顔には、はげしい悲しみの色があつた。「この花、知ってる？」と彼はきいた。彼女はいぶかしげに彼を見た。「エーリッヒでしょ。私、いくども森のなかで摘んだことがあるわ。」

「僕、家に古い手帳を一冊持っている。」と彼は言った。「昔はよく、歌や詩のようなものを書きつけたものだったけど、もう長いことそんなこともしなくなった。その手帳の間にエーリッヒはたくさんありますよ。むろんもう枯れてしまいましたが……、その花を僕にくれたのは誰でしたっけ？」彼女はだまっていた。だが、目を伏せたまま、ラインハルトが手にしているエーリッヒを見ているだけだった。こうして二人は長い間、そのまゝ立っていた。彼女が目を見てラインハルトを見た時、その目は涙をいっぱいこぼしていた。

「エリザベート。」と彼は言った。「あの青い山の彼方に、僕たちの青春時代はあるんだね。どうなってしまったらう？」二人はそれきりなにも話さなかった。

その夜、彼は眠れなかった。彼はしん／＼とふけていった。やがて彼はたち上って、あけはなした窓へ身をよせた。みると、東の空は仄かに白みそめていた。ラインハルトは急に振り向くと机のそばに歩みより、一枚の白紙に何か二三行書きつけた。そしてそっとドアをあけ、玄關におりていった。その時、二階のどこかのドアがあく音が聞えて、誰か階段をおりてくる者があった。エリザベートだった。彼女は手を彼の腕の上において、唇を動かしたが、ひとことも聞きとれなかった。

「もう二度と来ては下さらないのね。」とようやく彼女は言った。「わかってはいるわ、うそをおっしゃらないで。もうあなたは二度と再び来て下さらないのね。」

「え。」と彼は言った。彼は歩きだしてからもう一度振りかえった。エリザベートは同じ場所にじっと立ちすくんだまゝ、うつろな目で彼を見送っていた。

☆

◇

☆

◇

◇

白 い 花

やさしいそがれの光に
音もなく散る白い花よ

お前はなぜそのように散りいそぐ
ふと切ない心に呼んでみる

遠い人の名を

真珠色のガラス戸にしろす

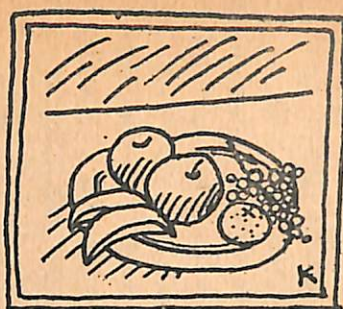
その悲しいイニシャル

あゝ宿命とは

どんな神様の御心なのか――

又、ひとひら白い花びらが散る

ちぎれた愛の証あかしのように――



「アルバイトのスケッチ」抄

二年D組 木村 拓郎

○プロローグ

十二月二十三日 私、青木武雄は友人から借り集めたロシア文字集十数冊を棚に並べ、その背クローズのツルゲーネフ、ガルシン、プーシキン等に明日からいどむかと一人喜びのため、身振いさえていた。そんな所へ一通のハガキ、……：御子息のアルバイトの件了解しました。云々……との小林専務からの不愉快な文面である。もちろん父が毎日勉強も運動もせず小説ばかり読もうとしている私に先手をうった結果なのだ。がこんな父を恨みながらも、翌朝八時には北沢の最大産業第二佃煮工場で働いていた。しかし働いてみると勤労の喜びと共に、そこにいる人物の一人々々に感動して、下手ながらも、文章に書きたくなる意欲にかられた。作業の内容も折詰・箱詰・袋詰・豆の選別等の室内の作業から、レットル貼り・包装・積荷・荷降し・室外の仕事、それに工場の外では、三輪車（オートバイ）での配達・デパート勤務と十数種以上もあり、日数の過ぎるのも忘れる位だった。そんなあわただしい中で私の会った人物

は、男女従業員・運転手・事務員・実習生・使用者・アルバイトと八〇名以上にも上るので、彼等を一人々々スケッチ出来そうもない。私に、M・ミッチェルのようなスケールの大きいドラマが書けるものなら、一人残らず登場させて、巨匠V・フレミングのモップションのような効果があげられるのだが――。今の私がそんな真似をしても、巾一センチ、長さ八〇センチのテープのような並列的文章になつてしまふに違いない。そこで重要人物のみクローズアップし怪しげな語によつて、その人物の特徴を出そうと苦労している。以下、物狂おしき人物スケッチである。

○専 務

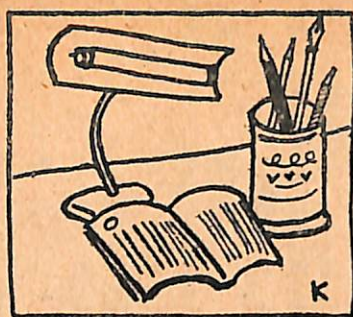
この工場で、およそ評判の悪い人物はと人々に問うならば、彼等は口をそろえて、私にアルバイトを世話してくれた小林専務の名をあげるだろう。彼が私が私達の作業場に入ってくると、そこに居るすべての人の心臓は急テンポに働き出し、手は神経の命令をきかずこわばってしまう。そして一瞬の沈黙の後、彼のどもったせわしげ

な言葉が次々と人々を刺す。今日もTデパートからの注文で、千六百折の砂糖（ハゼの甘露煮）を作ることになり、すでに八百折作ったとたん専務があわただしく駆け込んできた。私はなんだか不吉な事が起りそうだなと感じた。専務は私の期待を裏切らず、製品の一つをハカリのせ、指針が五八という数字を指すのも、もどかしく怒鳴った。「ナ、なにしたらんだ！」次の言葉は口がけいれんし、舌がもつれて、なか／＼出て来ない。数秒の沈黙の後、皆の要望に答えてやつのどにかえていた言葉が出て来た。「二三双も……才多いやないか！」「……」「一折二双でも、七千六百折なら——、ナナンぼになると思つとるんや！」そんな所で、彼は怒り、興奮、驚かす、時間、金、目方などが入り乱れ、うずまく頭脳の中で一生懸命1600×3を計算したが出てこない。一秒二秒……彼の声でない口元はたゞ、むやみにけいれんするのみである。私は同情して「ハ、ハイ、三貫と一、二百双です」と答えてやりたい位だった。彼は沈黙と冷静な落ち着きを見せている作業員に対して——「ハ、早、ハ計り直さんか！」とだけ言うと、まだ何事か言いたげな口唇のけいれんをおさえて出て行った。計量係りの数介さんは、専務の足音が消えると、ましかねたように、「ウわかりました！」と叫んだ。室内は爆笑が湧き、専務の口調をまねる幾人かの声の中にまじった。私も笑った。しかし一瞬、私の記憶が私の笑をビタリととめた。そればかりではない。つい数秒前まで数介さんと同じ事を言いかねなかった自分であったはずなのに、今は笑いこけている人々を苦々しくさえ思っている。父がかつて小林さんの性格について話したのを思い出したからだ。現在も、専務に対しての笑い声が続いているが、彼の立派な行為の一部

分を私は私の下手くそな文で、オックスフォード辞典ほどの厚さに書いても書き足りないだろう。当時、Sデパートの図案部に勤務していた父の話をまとめてみよう。彼は小学校を出ると単身長崎から上京し、ある大店に小僧奉公した。その仕事熱心をSデパートの支配人にかわれ、十六才でSデパートの店員となり、わずかに十九才で食料品売場の主任となった。朝は出勤二時間も前から店員売場、商品の配置などを考え、夜はおそくまで一人、朝の配置での売り上げはどの程度だったかと研究し、反省した。ところがある時、彼の下で店員が客と口論をした。め、彼は自らその責任をおって辞職してしまった。支配人も全店員も彼をひきとめようとしたが、彼の強い責任感の前にはどうする事も出来なかった。その後間もなくSデパートはつぶれ、店員もバラバラに散り、いつしか彼の事も忘れられて行った。父が小さな町の佃煮工場の専務になっていて彼を知ったのは、昭和二十五年の事であった。二十八年の夏、彼が私の家を訪れ、父に糸のようにけずった独特の味を持つ切りいかを作り出したから、レッテルを描いてくれと言いつ出した。そのレッテルというのが、なんと金粉・銀粉を吹きつけた一枚十円もするやつなのだ。父も佃煮のレッテルは一枚一円で済む二色刷りが普通である事は知っていたが、彼が何かを考えているなと感じて、依頼通り、富士と菊をあしらった豪華なを描いてやった。彼はこれに「新雪煮」という文字を入れ、二千箱に貼りつけて薬地へ送り出した。なんとこの時使った三輪車（オートバイ）の側面にも、あざやかに富士と菊を描いておく事を忘れなかった。たちまち、卸問屋や佃煮業界では新雪煮に注目し、注文が殺到して製産が間に合わなかった。こうして最大産業も新工場を

建て、いくつかのデパートに売り場も設けるようになった。それから彼は、新らしく、素晴らしい、いかの製品をいくつか作り出した。又今年の北海道のいかの不漁に際してはサニタリーピンズと称するポリエチレン袋入りの長期保存食品を発売し、豆を圖案化してマスケットになるようなものを書いてくれと父の所へ来た。そして、今もなお、無口で外交的手腕のない社長を助け、一人で工場のために働いている。私は常に仕事ばかり考え、映画を観てい

ても、いかの足が浮んでくるというような彼を人生に興味を持たぬあわれな人とも思えたが、彼には仕事に追われている時が、一番幸福そうなのである。彼から仕事に対する関心を奪ってしまい、せか／＼した態度も取り去り、言葉もなめらかに人の耳に聞えてくるようにしてしまつたら、魂のぬけた彼の形をした隣人が出来ることだろう。



創作

家

出

二年A組 木村 康雄

或る冬の朝、古宮家の人たちが眼を覚ましてみると、一人娘の影の姿が、家の中に見られなかった。家を出したのである。女中のさきが彼女の姿が見えぬと報告した時、古宮家の人たちの脳裡に、家出した、という考えが一瞬のためらいもなくひらめいた。弁護士古宮氏と、同じ事務所に行っている長男の英男も、その日は出かけるのを止めなければならなかった。家の中をさがしてみたが、置手紙らしいものは発見されなかった。

古宮氏とその妻の初子、そして英男と女中のさきの四人が、朝食もとらずに茶間のテーブルを囲んでみたものの、どうにもならなかった。とにかく何か手をうたなければ、とみな同じ考えを持ってはいたが、どうしてよいのやら、考えはどう／＼めぐりをするばかりで全然まとまらなかった。久しく沈黙が続いていた時、次男の成夫が、酒で眼を赤くし、パジャマをだらしく着たまゝ部屋へやってきた。みな眼は、一瞬彼の方に向けられたが、たゞ彼をそこに

みとめただけで、彼の存在なんて問題にしないようであった。成夫は戸の近くに立ったまゝ、部屋の空気を感ぜると卑屈な笑いを浮かべながら言った。

「どうです、ぼくの言った通りでしょう。いつかはこういうことになりますって。ママは頑固だし、パパは無関心だし、おまけに兄さんときたらまるで女の腐ったような人間だから。家を出たくなるのも無理ないですよ。」誰も彼の言うことなど聞いていなかった。たゞ兄の英男の悪口を云った時、英男に前から想いをよせているさきが、顔をかすかに上げたのみであった。成夫はなお続けた。

「はっきり言いますがね。何と言っても一番いけないのはママですよ。世間体のことばかり気にかけて、子供の気持なんて、てんで考えてみたことではないでしょう。影子は吉岡が好きだし、吉岡も影子を愛してゐるんです。それで何も不足はないじゃありませんか。パパは問題ないですからね。」

「成夫、いゝ加減に、いゝ加減に……」初子はとうとう我慢し切れずに、金切声に近い声を発した。終りの方は不可解な涙声になってしまった。

「そんなに興奮したって始まりませんよ。第一、これからどうする気であるんです。もう影子は二度と帰っちゃきませんよ。たとえ強引につれ戻したって、かえって結果は悪くなるにきまっていますからね。」

「いゝえ、成夫。あなたにそんなこと言う権利なんてありません。」
「へえ、そうですがね。しかしぼくだって口を持っている限りは、何でも言ってしまうつもりですがね。ママだって口じや大きなこと言っているけど、ぼくに協力してもらいたくたまらないんでしょ。」

う。ぼくは吉岡の親友ですからね、何でも知っています。」
「嘘です。わたしは口が腐ってもあなたなどにものを尋ねません。お願いですから少し静かにして……。」

「ほら、ママはすぐにそれだ。人を軽蔑しておきながら、ものを頼むじゃありませんか。」

「おい、よさないか、成夫。」

「パパは黙って、下さい。ぼくだってこんなこと言いたくはないけど、今じやないとチャンスがないように思うのです。言わせて下さい。ママはエゴイストだ。少し生活に余裕が出来ると女ってものは、すぐそうなるんだ。今だって本当に影子のことなんか考えちゃいないんだ。この事件がまるく納まって世間から何も言われなければいゝなんて思っているに違いないんだ。」吉宮氏は彼にこのまゝ喋らせておくのは危険だと思ったが、何だか自分の言いたいことをそのまゝ言ってくれているような錯覚さえ起してしまった。

「ちょっと待ちなさい、成夫。お前の言うこともわかるが、今はそれより影子の方が大切なんのだ。」吉宮氏はちょっと勢いづいて言った。

「そうだ、ぼくもそう思うよ。影子の方を先に解決しなくちゃならないんだ。」この時兄の英男が初めて口を切ったが、成夫はそれにはほとんど気にかけないといったように、皮肉な一瞥を与えた。英男は弟のこんな態度に憤しみを覚える勇氣さえ持ち合わせていなかった。自分のだらしない腹を立てながらも、どうもならない口惜しさに、弟の態度は野蛮なことだと快めつけてしまった。無理やり自分にそう思い込ませてしまった。今はもう事件がまるく納まってくれ、はい、と、そればりを願っていた。

「ぼくがこんな人間になったのもママのせいですよ。影子だって普段はおとなしかったが、心じや何を考えていたかわかりやしません。ことに吉岡と知り合って、ママに交際を止められてからは、ほとんどぼくとしが話をしなかつたくらいなもの。でもぼくにだけは本当にうちとけて話してくれたんだ。ぼくの部屋へやってきてこそり酒を飲んだことだってあります……。ママ、泣くのはおよしなさい。ぼくにはかえって腹立たしく感じられるだけです。」

「成夫、わたしは泣いてなんか居りません。ただ口惜しくて……。あなたがそんなになったのも吉岡さんなどとき合から……。」
「違う、それは違いますよママ。彼はよい人間です、むしろ悪いのはぼくの方です。ママは何でも自分に都合よくお取りになるんですね。吉岡は大学の成績もよかったし、たゞちよつとしたことですぐ絶望して、自暴自棄になってしまう性質なんです。彼だって影子を知ってから真面目に生きようとしたのです。それなのにママは彼と影子をあんなことに……。」

「成夫、お前は二人がどこにいるのか、知ってるんじゃないのか。」英男がたまりかねてきた。
「まさか、いくらぼくだって二人の墮落ちの手伝いまではしませんよ。」

暫くは沈黙が続いた。時計はまだ午前九時少し前を指していた。吉宮氏は事情がわかってくると、何だか馬鹿げたことのように思われてきた。成夫と影子がたぐらんだ狂言ではないかとも思った。何と言うことはない、二人を結婚させればそれで事は終りだ。そう思うと今まで気をもんだのが、むやみに残念に思われるのだった。

英男はもっと成夫にきいてみたいと思つたが、とても言い出す勇

気がなかった。出来ることなら、今すぐ事務所へ行ってひとりきりになりたかった。自分にはこの事件に参加する資格がないのだと思つた。

もう、誰も何も言い出さなかった。成夫はひどく空腹を感じていた。

「さき、コーヒーとトーストをぼくの部屋へもってきてくれな

いか。」そう言い捨てると彼はさささと自分の部屋へ引き上げてしまった。
初子は戸の閉まる音にふとわれに帰った。自分はもうしたらいのだから。二人を結婚させたものだろうか。いやいけない。彼女は迷っていた。自分が間違っていたのはわかっていたが、かと言って成夫の言うことが正しいだろうか。二人を結婚させることが最も早い解決法にはちがいないが、しかし彼女はそれが出来るほど単純ではなかった。いろ／＼と考えてみたがどうにも決心がつかなかった。実際、彼女にはどうしてよいかわかっていなかった。自分の考へてでんで自信がもてなかった。どうしよう。彼女のそういう心を裏切って、「影子は大丈夫なのかしら。」と一人言が口に出てしまった。

さき自分英男にひどく失望させられたことに、ひとりで腹を立てていた。本当に成夫さんがおっしゃる通りに、女の腐ったような人だ。それにくらべて成夫さんは何と感じがいい人なのだろう。彼女の想いは単純に成夫に移っていった。成夫の食事を持って彼の部屋へいくと、彼はもう背広を着て髪の手入れをしていた。成夫は鏡の中に彼女を見ると、

「あ、もうぼく出かけるから、持って帰ってくれよ。それからね、これ影子の居所なんだけど、ぼくが出かけてからママに渡してくれ。」さきの手が、小さな紙切れを受けとる時、かすかにふるえていた。

さきは成夫を本当にいゝお方だと思った。

青い花

青い花、

思ひ出のボルドー、

美わしき乙女の胸のトビラを、

そっとやさしく開けたのは、

ボルドーあなたでした。

胸のさ、やき胸をふるわし、

クビュウティフルク、クトラブルク

クハッピネスクで私を見まい、

高き調べの下で、

透き通る煙のゆらぐのを、

見せてくれました。

晴れた日は、

青空に浮かび、

雨の日は窓ガラスに浮かび、

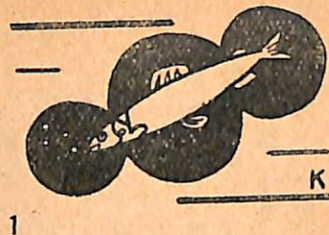
ボルドーと言う名を、

私に与えました。

創作

木枯し

一年C組 高津龍二



「ガラ／＼。」

快くすべり車の廻わる音がして、川口家の玄関が開いた。

五尺九寸、二十貫という巨体の慎一は、漂然と、そこに立ちつくしていた。

「今晚は。」（三年ブリにやって来たのに、十年も来なかったよ
うな気がする。……これが敷居が高くなったという事なんだろうか
？なんにしても、チットモ、懐しくなんかないや……）彼がこんな
事を考えていると、やがて、わずかに聞き覚えのある従姉の声がし
た。

「どなた？」

「僕です。」

「えっ？まあ！慎一さんじゃあないの、お上りなさいよ。」いぶか
しげに出て来た従姉は、彼女にしては最高のお愛想でこう言った。

「ええ。」

（さあ！これからが大変だぞ）彼は、玄関に上る時に、そう思わ
ずにはいられなかった。

そして彼一流の動作で、「ウン。」と下ッ腹に力を入れた。こう
すると、どんな時でも落ち着けるし、時と場合によっては、ものす
ごい蕪度胸が湧いて来るのだ。

従姉の案内で、彼は、家族の集っている居間へ通された。襖を開
けた途端に、彼は、自分が部屋中の者の陰険な視線をあびている事
を敏感に感じとった。こんな憂鬱気のリーダーたる伯母は、やは
り、この中で最初に言葉を切ったが、それは、（まあ、随分大き
くなったわね）といったのでも（皆さん、お元気？）と尋ねたので
もなかった。

「今日は何の御用ですの？」暖かみなどは、ほんの少しもうか
いられない、ときたまされた双物のように冷たい口調だった。

彼は、いつでも、こんな口調で話しをする（自分には特に）伯母
に、身震いをする程の嫌悪を感じていたが、彼は、出来るだけ物静
かに、こう答えた。

「実は、今日は、いろ／＼、お伺いしたい事や、お話ししたい事
があるんです。」

「そう、それじゃあ、お伺いしましょうか。」伯母の口調は、すでに、慎一に宣戦を布告していた。しかし、それによって、慎一も又、あの二十貫有余の巨体のどこからか、じーん、とこみ上げてくる、ファイトを彼自身感じているのであった。要するに、伯母と甥との戦いは、もうすでに始められていたのだ。

「伯母さん、大変申しにくい事なんです……今までの家賃と、それから、ずっと前に母がお借りしたお金、全部でどの位に、なっているでしょう？」慎一はわざと馬鹿丁寧に言った。して見ると、この女は、慎一にとって、伯母であると同時に、家主でもあるらしい。伯母の顔は皮肉まじりの微笑で、心持ち歪んだようだ。

「それで、来たの？」

「はい、それだけではないのですが……まあそうです。」

「そうね、七万位じゃあないかしら。」

「正確な金額が知りたいんです。」伯母の顔が今度は、ひどく醜く、引きつった。頭から小馬鹿にしていた甥への感情に、新たに憎悪の念が、加わったのだ。彼女は、腹立たしげに、子供に紙と鉛筆を持って来させて、しきりに計算を始めた。最初、慎一をこの部屋に連れて来た従姉は、かたわらでじっと、それを見守っている。

それ以外の従兄達は、さも、(母さん達の話には、俺達は、無関心なんだよ)というふうな風を装って、てんでに、新聞を読んだり、お茶を飲んだりしていた。慎一は、初めとまったく同じ格好で、キチンと正座していた。彼は、又、常に微笑をたゝえていた。しかし、その微笑が、実は、彼が無理にこしらえているものだという事は、そこにいる誰にでも、容易に悟られてしまうのであった。長い沈黙の後、ようやく、伯母が、口を切った。

「決っているでしょう。ところで、御用は、それだけですの？」

「いえ、実は、これからの方が大事なんです。」

「あなたと私との間に、そんな大事な事なんてあったかしら？」

「え、あるんです。どうしてもハッキリさせておかないとちやあならない事がね。」

「まあ、とにかくお伺いしなくては。」

「じゃあ、さっそくお尋ねします。」努めて、冷静を装っていた慎一の声に、急に怒りが加わったので、伯母と従兄達は、何か不気味な気持になった。もう誰も何も言わなかった。慎一はしかし、かまわずにしゃべり出した。

「今から、丁度五年前、そう、僕がまだ中学生だった頃、母がお宅にお金を借りに来た事がありましたね。」

「あったわ、二月頃じゃあなかったかしら？」

「そうです、二月二十一日です。その時あなたは、(うちには女郎に貸す金なんかあるもんか)っておっしゃって、うちの母を追い帰したそうですね。」

「……………」

「うちの母は女郎だったのですか……………」

「……………」

「答えてください。」慎一の声は、威圧的だった。

「そんな昔の事、今更どうこう言っちゃって……………」

「出来事は過去の事です、その言葉は現在の僕達に大きな影響を及ぼしているんです……………」とにかく、答えて下さい。」

「言ったわ。だって似たようなもんじゃあない。」

慎一の顔は、一瞬蒼白になった。伯母は、思わず一歩後ずさり

「家賃の方は、一ヶ月三千円で二十ヶ月ですから六万円、それからずっと前にお貸した分が一万五千円だわ。」

「そうすると、……………両方で七万五千円っていうわけですね？」

「そうです。」

「僕もそうだろうと思いました。」

そう言っただけはポケットから財布をとり出して、千円札を七十五枚伯母の前にキレイに重ねた。

「どうも、本当に遅くなっちゃって、おわびの申しようもあります。」

敗北感と、理屈を超越した喜びとが交錯した、伯母の妙な表情が彼の前にあった。慎一は、しばらくの間、楽しそうに、その顔を眺めていた。たった今の自分の言動が、存外ひどく、伯母の心を動揺させたという事が、彼には、ものすごく嬉しかったのだ。だが、やはり、この伯母は、慎一が考えていたように、物事を素直に喜べない人だった。彼女は、やがて、例の冷たい眼で慎一を見つめながら、いかにも仕方なさそうな声で言った。

「御苦勞様。」

「伯母さん、とにかくこれで、当分の間、今の家に住んでいいんです。」

「家賃さえ払ってくればね。」

「勿論、これからはキチンとお払いますよ。」

「そう、貴方のうちも少しは楽になったのね？」

「どうだか……………」とにかく、これからは、家賃さえキチンとお払えば、追い出したりしませんね？」彼の言葉は、妙にこゝだけ力がこもっていた。

した。明かに、怒りにふるえている二十貫もの巨体が急に恐しくなったのだ。しかし、慎一は、又すぐに元の平静をとり戻した。

「そういわれても仕方ないかも知れません。でも少くとも今は母がそうではなかった事を認めてくれますね？」

「まあね。」

「現在、母に対して、悪かったと思いますか？」

「……………」

「いつでもいいですから、母に謝って下さい。」

「いやだわ。」

「なぜです？」

「なんでもよ、まっぴらだわ。」慎一は、伯母の顔をじっと見つめた。

「そうですか……………」それならもう、その話はよします。ですけど、もう一つだけ、お尋ねしたい事があるんです。」

「ついこの間、うちの兄貴が、お宅の会社の入社試験を受けた時あなたは、なぜ、じゃまをしたんですか？」

「じゃまなんかしないわ。」

「とほけないで下さい。(彼奴は、女親しきかないし、その母親だって素行が悪いんで評判なんだ)って、試験官に告げ口させたのは誰です。」

「……………」

「うちの母のどこが素行が悪いんです。」

「……………」

「何も兄貴だって、故意に伯父さんの会社を、選んだわけじゃあない。偶然、学校の紹介先がそうだったというだけの事なんだ。それ

なのに、一体なんだったって、余計な干渉をするんです！そんなに僕の家が憎いんですか？そんなに僕の母が憎いんですか！本当の姉妹のくせに、なぜ、そんなに、母を憎むんです！もう彼の声は、火を吐くようだった。

「あなたにお話ししたって、分らない事だわ。」

「分ろうと、分るまいと、僕の母を侮辱し、兄貴の就職のじゃまをした事は事実です！」

「うるさいわねえ、だから、どうしようっていうの？」

「こうしようって言うんです。」慎一は、立ち上がるなり、自分の前の千円札をわしづかみにして、力一杯、伯母の顔にたたきつけた。そして、それだけではあきたらず、ドッキリして蒼くなっている伯母の横つらを、思い切り張り飛ばした。伯母は雑布ボロのよりに、情けなくボタンと倒れた。

「なっなにをするんだ！」いままで新聞を読んでいるフリをしていたこの家の長男は、夢中になって、慎一に武者ブリついた。慎一は軽々と、その胸倉をつかまえて、自分の顔のすぐそばまで持ってきた。

「君もたしか二十になったわけだ。もう物事の善悪の区別ぐらいはつくだろう。おい／＼なんだって君の親父のやった事をとめなかつたんだ？」そう言いながら彼は、右手でつかんでいた胸倉を放し、同時に左手をかためて、力一杯なぐりつけた。長男の身体は三メートルも吹っ飛んだ。忽ち、部屋の中は、強盗にでも入られたような雰囲気となった。呆氣にとられていた伯母と従兄や、恐怖のどん底のような顔をしている従姉たちを見下して、慎一は昂然として立ち上った。

そうひとり言を言ったら、彼の頭の中には、あの金をつくるまでの苦闘の五年間が、まじ／＼とよみがえって来た。走馬灯のような回想が、今や彼の頭脳を完全に支配していた。

五年前

「カラ／＼。」つい先刻、俺が伯母の家の門をあけた時と、まったく同じ音がして、母が帰って来た。いつもなら、必ず「たゞいま。」と、言はずなのに、今日は妙に黙りこんでいる。「お帰んなさい。」冬の寒い夜道から帰って来た母を俺達兄妹と、熱い湯気をたてゝいる食卓が温かく迎えた。

「どうでした母さん？」貧しい食事の最中に兄貴が尋ねた、俺は思わず耳をかたむけた。

「駄目だったよ……。」病後の母が、伯母の家へ金を借りに行ったのだという事は俺達兄妹には、分りすぎる程、分っていた事だった。俺達は皆んな下をむいて、黙ってしまった。

（明日から、どうやって食って行こう……。）という事が小学校五年の妹にでさえ、切実に感じられるのだ。俺は涙さえ出て来た。やがて淋しい食事は済んだ。

「英雄、チョット。」と、当時高校三年の兄貴が母に呼ばれ、母と共に二階へ上って行った。俺は妹と一緒に布団を敷いて横になった。妹は、まもなく眠ってしまったが、俺は中々眠る気になれなかった。伯母につき放された母が可愛想で仕方がなかったのだ。一時間程したら、兄貴が降りて来て、俺の隣に布団を敷いた。

「慎一、まだ起きているのか？」

「うん。」

兄貴は布団の中へもぐり込んだ。又、しばらく時間がすぎた。

「今、あなた達が感じている、百倍もの口惜しさを、僕等は、五年間も我慢してたんだ。」それから、慎一は、なぜか悄然として、立ち去った。

2

木枯しが、彼の耳もとで、ヒューと鳴った。新宿から渋谷までの夜道を彼は歩こうと思った。悪い幻に取りつかれている自分を、少しでも早く、元の自分に戻したかったのだ。

彼はたった今の自分の行為を深く反省していた。

（なんにしても、伯母をなくったのは良くなかった。……しかし、俺だって、何も初めっからあんな事をしようと思っていなかった。じゃあないんだ。それどころじゃない、俺はあの伯母と和解しようと思っていたんだ。俺の心の中にある疑問や鬱憤を全部ブチマケ、伯母にも、俺達を憎む理由をさげ出してもらって、お互いに腹の底から話し合おうと思ったんだ。ところが伯母は、そう簡単には妥協してくれなかった。俺がいくら穏かに話をしても、心は氷のように冷く、口調はキリのようにとんがっているんだ。俺は静かに話そうと努力している中に、だん／＼こんな伯母が憎らしくなって来た。母が侮辱されたあたりになると、世界中にこんな憎らしい奴がいるだろうか……とさえ考えた。そしてそれからは、もうなにがなんだか分らなくなってしまうんだ。しかし、フフフ……まったく、思いもかけない結果になってしまったなあ……。）

ワシントン・ハイツぞいの、なだらかな坂道に差し掛った時、彼は、フツ微笑した。七万五千円をつきつけられた時の、当惑しかった伯母の顔が思い出されたのだ。

（伯母さん、あの金は、一体どうやって作ったんだと思います？）

「慎一、俺は明日から働くぞ。」と突然兄貴が言った。

「働く？学校はどうするの？」

「勿論行くさ。学校に行きながら働ける仕事を探すんだ。」

「フーン。」

「早く言えば、牛乳屋さ。」

「兄さんが働かなきゃ食えなくなっちゃったの？」

「そうじゃあないよ、借金を返すんだ。」

「借金って、川口の伯母さんとこのかい？」

「そうだよ、慎一、今日、お母さん川口の家で何んて言われて来たと思う。敷居をまたぐなり（家は、女郎なんかには用はないのよ。）って言われて、玄關拭いだってさ。」

「女郎って、なんだい。」

「お前の知っている言葉で言えば、パン／＼ガールさ。」

「エッ！母さん、パン／＼ガールなんかいい。」

「運うよ、とんでもない事だ、母さんはね、そこいらの事務員位じゃあとても、俺達三人も食わせられないから、女給をやっているだけの事さ。ところがね、今の時代は、どうかすると、女給と女郎が混同されちゃうんだ。」

「だけど、なんだって川口のパン／＼ア、そんな事言うんだらう。」

「金を貸したくないからさ。」

「口惜しいなあ。」

「お前だって、そう思うだらう。兄さんは、もって口惜しい……：それでね、明日からでも働いて、今までの借金を全部たゞき返してやろうと思うんだ。」

「だけど、牛乳屋位やったって、大した事はないぜ。」

「五年掛りなら、なんとかなるだろう。」

「五年？」

「そうさ、五年たちや、俺も、何とか大学を出られるだろ。そうすりゃ、家の方は何とかなるさ。だから、今から丁度五年目の日に俺は今までの借金と、家賃を全部返して、川口の家とは縁を切ろうと思うんだ。」

「家は？」

「家賃さえ払えば、他人同志だって、大威張りだよ。」

「兄さん、俺もやるよ。」

「エッ？、何を？」

「働くんだ、新聞屋をやってね。」

「エッ？」

「僕等の組にも三人いるんだ。僕だって出来るよ。兄さん一人じゃあなくて、僕と二人でやろうよ。そうすりゃ五年もかけなくたって、三年位で、出来るだろ。」

そばで妹が、すや／＼と眠っていた。俺と兄貴は、その晩、夜通し語り明かした。それから、兄貴は三日後に興真牛乳に、俺は四日後に朝日新聞に、それ／＼勤めた。初めのうちは、調子よく貯金も出来たのだが、日がたつにつれて、二人の収入を貯金に回す事は、困難になって来た。(収入の大部分を、家計につき込まなければならなくなってきたのだ。)又一方、その間家賃を一銭も払わなかったで、川口の伯母からは、毎日のように出て行けと言われ続け、ある時などは、与太者風の男を雇って、おどかしさえもした。(もっとも、此奴は俺が逆におどかして追いかえしてしまっただが。)俺と兄貴は、それでも互いに励し合いながら頑張りに頑張った。そして

昨日が丁度その五年目だった。貯金は八万円近くになった。兄貴も一度は、川口の伯母の妨害で就職できなかったが、つい先だって、ようやく某社に入社できた。思えばこの五年間は夢のようだった。母が侮蔑されて、発憤し、今日までの毎日を、伯母の借金を返済する事だけに費やした。俺達の純情さが、今になってみると、馬鹿々々しくさえある。

伯母が兄貴の就職のじゃまをした事が分った時、激しやうい兄貴は、血相を変えて「よし！川口のパ、ア、た、つ殺してやる。」とさえ言った。俺は、この分では、兄貴が借金を返しに行ったら何をやらかすか分らないと思ったので、あえてその役を買って出た。だから俺は、出来る事ならあの金を渡した後で、伯母と和解しようと言っていたのだ。五年前の思の事と、ついこの間の兄貴の事さえ謝ってくれたら、もう、それでい／＼と思っていたんだ。しかし、結局、結果は、あんな事になってしまった。家へ帰って母に言ったら、に言ったらどんな顔をするだろう。兄貴は、(よくやったって賞めてくれるかも知れない。だが、母さんはなんていうだろうな……)そんな事を考えている中に、彼はもう、自分の家の見える所にまで、たどりついていて、又もや木枯しが、強く、彼の耳たぶを吹きぬけていった。慎一は思わず、学生服の中で身を縮めた。

(完)

MEMO

住 所 錄

編集後記

春眠曉を覚えずの春三月、皆さんの手許に「る・くーる」第五号をお送りする。雑誌編集などという仕事はまだまだやってやったことがないので、御覧の通りあまり満足したものではない。まあ／＼といるところである。

文芸雑誌などというとなか／＼とつきにくいのが普通らしい。内容がかたいというのもひとつの原因であろうと思ったので、い／＼と新しい試みを取りいれようとしたが、なか／＼思うようには出来なかった。

表紙は木村拓郎君、カットは上条喬久君にそれぞれお願いした。御覧の通りすばらしい出来栄である。去年の表紙が「馬」で今年は「鹿」「馬」+「鹿」でバカとなる。ぐうぜんの一致だろうが皮肉なことである。

原稿は予想していた以上に集まった。もともと、あちこち頼み歩いた結果だが、例年より成績がよかった。協力してくださった方々へは深い感謝の念でいっぱいである。

編集を終るにあたり、ひとつだけ残念なことがある。(残念なこととはたくさんあるが、皆あきらめがついた。)それは親友の田宮君が、われ／＼高校生の道徳について論じたすばらしい評論を、ある事情で載せられなかったことである。かえす／＼も残念である。

(32・2・4 児玉記)

「る・くーる」 第5号 【非売品】

昭和32年2月28日印刷

昭和32年3月10日発行

編者 東京都立松原高等学校企画委員会
代表者 児玉 典 杉戸克彦
顧問 大和久鈴江

発行所 東京都立松原高等学校生徒会
代表者 久保 道 夫

印刷所 東京都世田谷区松原町 4-324
山下プリント社 TEL 327914

文房具なら

なんでもそろろ

大庭紙文具店へ

下高井戸駅前
電話(32)三六九四番

Ⅱ活版・謄写Ⅱ

印刷の御用は

山下プリント社

世田谷区松原町四の三二四
電話(32)七九一四番

万年筆なら

アフター・サービスの完全な

金子万年筆店へ

松高生は特別割引いたします
気軽においでください

書籍、雑誌、参考書

近藤書店

御注文の本は早速取寄せます
いつでも御用命下さい

下高井戸駅前通り
電話(32)5662番

山田

